392
127

山上の垂訓に關する研究

内村鑑三著

始

392
127

THE SERMON ON THE MOUNT

EXPOSITORY ESSAYS

BY

KANZŌ UCHIMURA.

山上の垂訓に關する研究

内村鑑三著

東京
柏木
聖書研究社

392-127

緒言

馬太傳所載キリスト山上の垂訓は基督教道徳の根本である、隨つて基督教を學ばんと欲する者は先づ之を明かにするの必要がある、此小著は此目的を以て大正元年(一九一二年)以來數回に亘り雜誌『聖書之研究』に掲載せし註解的論文を纏めて一書となしたる者である、基督教研究の一助たるを得ば感謝である。

大正九年(一九二〇年)八月九日

内村鑑三

大正9年9月 内交

目次

第一　取除くべき三個の誤解……一頁
第二　最大幸福＝心靈の貧……一二頁
第三　平和の祝福……二三頁
第四　信者と現世……三〇頁
第五　天國の律法……四〇頁
第六　馬太傳第五章廿八節の眞意……五〇頁
第七　天國の宗教……五七頁
第八　信者と蓄財……六五頁
第九　目の善惡……七〇頁
第十　惡の處分……八二頁
第十一　祈禱の效力……九三頁

山上の垂訓に關する研究

內村鑑三著

第一　取除くべき三個の誤解

山上の垂訓を能く理解するために、三個の誤解を取除くの必要がある。

其第一は名稱である。之を「山上の垂訓」と稱するのは抑々何から始つたのである乎、其事を知るの必要がある。是れは聖書が附けた名ではない。是れは多分英語の Sermon on the Mount を漢譯したものを其儘和譯したものであらう。Sermon は普通之を說敎と漢譯する。故に之を「山上の說敎」と譯するが更に適當であらう。然し乍ら「垂訓」と云ふも「說敎」と云ふも、馬太傳五章以下七章のエス爺に至るまでのイの言辭を總稱するに足りないのである。今日說敎と云へば、或る聖語を主題として敎師が語る信仰奬勵の言辭である。而して所謂「山上の垂訓」が單に今日吾人の稱する說敎でない事は、之を熟讀せし者の何人も能く知る所である。然らば之を「垂訓」

と稱して足れりやと云ふに、是れ亦爾うで無い事は明かである。「垂訓」と云へば道德上又は處世上の訓誡を垂れるものであつて、主として道德の教師の爲すことである。而して「山上の垂訓」の中に斯かる垂訓のあることは何人も否まない所である。然し「山上の垂訓」は單に垂訓を以て罄きない、其中に多くの垂訓以外の事がある。之を垂訓と稱して唯其一面を稱ふるに過ぎない。「山上の垂訓」は更らに廣い、更らに深い者である。

然らば之を何と稱すべきであらう乎。之に人が作つた名を附くるに及ばない。之に聖書自身が附けた稱號がある。

イエス、徧くガリラヤを巡り、其會堂にて教を爲し、天國の福音を宣傳へぬ

とある（四章二十三節）。天國の福音、第五章以下三章に渉りて馬太傳記者が記して居る者は、イエスが徧くガリラヤを歷巡りて其會堂にて宣べ給ひし天國の福音の概要である。イエスは到る所に斯かる福音を宣べ給ふたのである。或ひは其一部分を、或ひは其全部を、機に臨み變に應じて宣べ給ふたのであらう。何れにしろ所謂「山上の垂訓」

はイエスの宣傳し給ひし福音の模範である。馬太傳記者は、此時イエスがガリラヤ湖畔の或る小山の頂上に於て、彼の弟子等に對つて宣べ給ひし福音が最も完全なる者なりしが故に、殊更に茲に之を詳述して、讀者をしてイエスの宣べ給ひし天國の福音の全般を窺はしめんと爲したのであると思ふ。

「山上の垂訓」と稱せずして、聖書に循ひ「天國の福音」と稱し、其中に示されたるイエスの言葉の深き意味と、其相互の關係を能く理解することが出來る。物の性質は其名稱に顯はるゝものである。誤稱は誤解の因である。之を「垂訓」と稱するが故に、單にイエスの道德律とのみ解し易く、爲に其中に含まれたる美はしき福音を看逃し易くある。大抵の信者が「山上の垂訓」と云へばイエスの倫理なりと思ひ、罪人の罪を赦すための福音は之を聖書の他の所に覓めんとするは、是れ確に「山上の垂訓」なる誤稱の然らしむる所であると思ふ。「垂訓」ではない、天國の福音である。嚴格なると同時に恩惠に充ち溢れたる、イエスの宣べ給ひし喜ばしき福音である。

取除くべき第二の誤解は、之をイニスの宣べ給ひし最初の教示と見ることである。

馬太傳は新約聖書の首の卷であり、所謂「山上の垂訓」は其載せたる初の說敎であるが故に、之をイエスが宣べ給ひし最初の說敎であると思ふは無理ならぬ事であるが、然し少しく注意して四福音書を讀むならば、此誤解は容易に之を正すことが出來るのである。「共觀福音書」と稱はるゝ馬太、馬可、路加の三福音は之を讀むに約翰傳と對照して讀むの必要がある。前者はガリラヤ傳道を主として傳へ、後者はエルサレム傳道に重きを置いて居る。共觀福音書はイエスの最初のエルサレム傳道は全然之を省いて、直にガリラヤ傳道に說及んで居る。其理由は那邊に在る乎、今に至て能く知ることは出來ないが、然し其爾うである事は事實である。そしてガリラヤ傳道は、最初のエルサレム傳道に次いで始まつたことは確である。イエスはヨハネの說敎を聞かんためにガリラヤよりヨルダンに來り、其處にてシモンと其兄弟アンデレに會ひ、ピリポと其友ナタナエルを招き、後、一たび、ガリラヤに歸りしも再び逾越節にエルサレムに上り、其處にて公然傳道を開始し給ひ、神殿を潔め、ニコデモと語り、自己をユダヤ人に顯はし給ひ、ユダヤを去てガリラヤに往かんとし給ひし途中にヤコブの井の傍にてサマリヤの婦に語り、ナザレに歸り給ひしも豫言者は故鄕にて尊ばるゝ事なしと言ひ給ひて、玆處を去りてカペナウンに往きて其處に住み給ふた（以上約翰傳一章二十九節以下四章末節に至るまでの概略）。共觀福音書のイエスのガリラヤ傳道の記事は玆に始まるのであつて、所謂「山上の垂訓」なる者は彼が此時に說かれし者である。卽ち彼が南方ユダヤに下り給ひしことと二回、エルサレムにパリサイ人とサドカイ人と、學者と祭司等とに會合し、其宗儀と信仰とを視察し給ひし後の事であつたのである。此事を心に留めずして、「我れ汝等に告げん、汝等の義にして學者とパリサイの人の義に勝る事なくば必ず天國に入ることは能はず」との彼の言葉は理解らないのである（五章二十節）。所謂「山上の垂訓」は傳道の新參者の言葉としては餘りに用意周到である。縱令神の子イエスの言葉であるとするも、深く世人に接觸せずして斯かる愼慮に富める言を發することは出來ないと思ふ。

イエス自己を彼等に托せず、蓋彼れすべての人を知り、又人の心の中を知るが故に、人に就て證を立つる者を求めざれば也

とある（約翰傳二章末節）。イエスは此智慧を彼が逾越節にエルサレムに在りし時、多くの人に接觸して學んだのであると思ふ。

而して注意して馬太傳を讀む者は、如上の事實を亦其中に見るのである。其第四章十二節以下に曰く

イエス、ヨハネの囚はれし事を聞きければ（ユダヤを去りて）ガリラヤに往けり。而してナザレを去りてゼブルンとナフタリとの界なる海邊（湖畔）のカペナウンに至りて此處に居れり

と。ヨハネの囚はれし事はイエスのユダヤ傳道の第一期の終結であつた。彼は此時に、都會に於て天國の福音を宣傳ふるの無効を覺り給ふたのである。是れより後彼は田舍傳道に身を委ぬべく決心し給ふたのである。彼は一先づ故郷ナザレに歸り給ふた。然るに郷人擧つて彼を排斥せしかば、彼は同じガリラヤの中にて湖畔のカペナウムの邑を、彼の傳道地として選み給ふたのである（路加傳四章十六節以下）。イエスは此時既に傳道失敗の辛き經驗を嘗めて、能く其味を知り給ふたのである。

犬に聖物を與ふる勿れ、又豚の前に汝等の眞珠を投與ふる勿れ、恐らくは彼等足にて之を踐み、振返りて汝等を噬まん

とあるは、傳道失敗の辛き經驗を土臺として語られし彼の智慧の言葉として見るべきである（七章六節）。所謂「山上の垂訓」を單に大教師の訓誡とのみ看て解し難い節が多くある。訓誡に止まらない、實驗の言葉である。イエスが都會の教會に於て、多くの綿羊の姿にて來れる殘狼に會合して、幾回か其噬む所となり給ひし辛き實驗より出でたる貴き言葉である。

取除くべき第三の誤解は、所謂「山上の垂訓」はイエスが公衆に對つて爲されし大説教であるとの事である。然し其事は注意して五章一節を讀めば直に解かるのである。

イエス許多の人を見て山に登り坐し給ひければ弟子等其下に來れり

とある。「許多の人を見て山に登り」とある。「見て」は「見しが故に之れを避けて」の意である。俗衆の彼に押寄せ來りければ、彼は之を避けて山に登り給ふたのである。

日本譯に「弟子等も」とある其「も」は原文には無いのである。イエス山に登り給ひければ、弟子等其下に來り彼と相對して坐したのである。如斯くにして、イエスが茲處に述べられし言葉は、是れ特に弟子等に對して述べられし言葉である。其中に少數の所謂不信者も混合つて居りしやも計られずと雖も、然かも主なる聽聞者は弟子等であつたのである。路加傳には明白に「イエス目を擧げ弟子を見て曰ひけるは」と記してある（六章十二節）。其事を知るは、イエスの此嘉言を解する上に於て甚だ肝要である。イエスは茲に公衆に向つて彼の主義綱領を發表し給ふたのではない。彼は此事を首府のエルサレムに於て爲し給ふた。然し茲處は湖畔のカペナウムである。山高くして水淸き處である。而して彼の足下に集ひし者は、彼の信賴せる弟子等である。彼は茲に彼等の前に天國の福音を披瀝して、彼等を慰め且つ敎へ給ふたのである。故に曰ふ「汝等は地の鹽なり」、「汝等は世の光なり」と。是れ皆弟子等に對して言はれたのである。所謂「山上の垂訓」を以て、神がイエスを以て人に傳へ給ひし人の道であると解して、甚だ之を誤解し易くある。イエスは茲に彼の弟子（信者）の倫理道德

を敎へ給ふたのである。彼を識らざる此世の人等の守るべき、又は守り得べき道を說き給ふたのではない。

目にて目を償ひ齒にて齒を償へと言へることあるは汝等が聞きし所なり、是れ現世の道德にして汝等が今日まで敎へられし所なり。然れども我れ天國の市民にして我が弟子なる汝等に告げん。汝等の社會に在りては惡に敵すること勿れ。人若し汝の右の頰を批たば亦他の頰をも轉らして之に向けよ云々。

茲處に於けるイエスの言葉は、大略以上の如くにして解すべき者であると思ふ。是は一般道德ではない、信者道德である。現世の道德ではない、天國の道德である。信者の國（社會）なる天國に於てのみ行はるゝ道德である。所謂「山上の垂訓」をイエスの宣べ給ひし人類の一般道德と見て、其不可能事たるは何人が見ても明かである。此事を心に留めずして、山上の垂訓はイエスの宣べし道德なるが故に、人は何人も之を實行すべしと言ふは無理を言ふのである。トルストイ伯の基督敎に非常識の點多きは、此明白なる事實を看落したからである。所謂「山上の垂訓」は、露國英國な

どいふ非基督教國（而して彼等は確かに非基督教國である）に於て行はれ得べき者ではない。是はキリストの血に由て其罪を贖はれたる、清くして心の虚しき、謙下なる信者の間にのみ行はれ得べき道徳である。イエスは國家道徳として、又は社會道徳として、此天國の福音を宣べ給ふたのではない。彼の弟子等に、俗衆を離れて山の上に於て、天國の道徳として之を傳へられたのである。

＊　＊　＊　＊　＊

所謂「山上の垂訓」は説教又は垂訓と稱すべき質の者ではない。是は天國の福音である。嚴格の言であると同時に又慰藉の言である。主の嘉言である、實に天よりの喜ばしき音信である。是は又イエスの最初の福音宣傳ではなかつた。彼は此前に餓に自己を世に顯はし給ふた。イエスの福音宣傳は首府エルサルムに於て始まつた。而して都人士の之を受納れざるを看取り給ひて、彼は僻陬ガリラヤの地に退きて、茲處に純樸なる田舍人士の間に田舍傳道を開始し給ふたのである。所謂「山上の垂訓」なる者は、イエスの田舍傳道首途の大説教と見て多く間違がないと思ふ。之を

ユダヤ人の宰ニコデモに宣べ給ひし彼の言葉と比較て見て、其間に歴然たる都鄙の差別のあることを見るのである。

所謂「山上の垂訓」は又公衆一般のために説かれたる者ではない。是れは特に弟子等のために説かれたる者である。天國の福音であるから、特に天國の市民のために説かれたる者である。是は所謂イエスの倫理觀ではない、天國の憲法である、信者の道徳である。神の子と成るを得て天國に入るの特權を與へられし者の守るべき、又守り得べき憲法である。此心を以て之を讀まずして其中に解し難い事が澤山にある。

天國の福音、其市民の資格と義務、其律法、之に入らんと欲する者の覺悟、是等の事を順序正しく述べた者が所謂「山上の垂訓」である。全福音の手引とも稱すべき者であつて、能く之を學んで基督教の全豹を窺ふことが出來る。

第二　最大幸福＝心靈の貧

心の貧しき者は福ひなり、天國は卽ち其人の有なれば也

是を原語の通りに直譯すれば左の如くになる。

福ひなり、貧しき者は、心(靈)に於て、其人の有である、天の國は、が故なり。

福ひなり　所謂「山上の垂訓」は祝福の辭を以て始まつて居る。之をイエスの道德の發表とのみ思ふの誤謬は之に由て觀ても明らかである。福音は道德ではない、祝福である、恩惠の宣下である。而して道德は祝福の後に來る者である。此世の宗敎道德に在りては道德が前にして天惠が後である。天惠は道德の結果として人に臨む者である。然し乍ら、神の道に於ては其反對が事實である。初に恩惠が下りて其結果として道德が要求せらるゝのである。神が初にアブラハムを召し給ふに方て、彼は先づアブラハムより道德を要求し給はなかつた。彼は言ひ給ふた、

我れ汝を祝み汝の名を大ならしめん、汝は社福の基となるべし、……天下の諸の

宗族汝により祝福を獲ん、

と(創世記十二章二、三節)。而して彼が多くの恩惠に與かりて久しき後に至て

汝、我前に歩みて完全かれよ

との聖語が彼に臨んだのである。卽ちアブラハムの場合に於ても、恩惠の下賜は前にして道德の要求は後であつたのである。又イスラエルの歷史に於ても、契約(恩惠)は前にして律法(道德)は後に臨んだのである(加拉太書三章十七、十八節參考)。神が其愛子に對つて爲し給ふことは總て此順序に循るのである。先づ祝福の宣下があつて、然る後に之に應ずるための道德の要求があるのである。

「福ひなり」　幸福なりとも、神に祝まれたる者なりとも、解することが出來る。其當時に在りても世間普通の言葉であつたに相違ない。多分今日の日本人の言葉を以て云ふならば、「仕合せなり」と言ふのが最も能く此言葉に適合するのであらう。「仕合せなり」と、善き妻を迎へたる者は仕合せなり、華族の家に生れたる者は仕合せなり、富豪を姻戚に有つ者は仕合せなりと。仕合せとは天に惠まれたること、又は

運の好きことである。而して普通の場合に於ては、「仕合せ」はすべて此世の所有又は境遇に係はるのである。世の好運兒を稱して仕合者といふは此意味に於ていふのである。

而してイエスの眼にも、亦仕合者卽ち好運兒があつたのである。而して彼は今之を列擧し給ひつゝあるのである。我が好運兒は誰ぞとの題目を設けて、彼は今其特性を宣べ給ひつゝあるのである。

貧しき者は 好運兒は誰ぞ、神に祝まれたる者は誰ぞ。此問に對へてイエスは第一に言ひ給ふた「貧しき者なり」と。貧しき者は仕合せなりと。逆說か、妄誕か。而かもイエスは爾か曰ひ給ふたのである。

汝等貧者は福なり、神の國は汝等の所有なれば也

とはイエスの此場合に於ける言葉であつたと聖ルカは傳へて居る(路加傳六章二十節)。福者は富者であるとは世の定見である。然るにイエスは之に反して曰ひ給ふたのである、福者は貧者なりと。此冒頭の一言を以て彼は聽者を驚倒したであらう。

貧者とは物を有たぬ者である。金銀を有たぬ者、財貨を有たぬ者、土地、家屋、衣類等此地に屬ける物を有たぬ者である。而してイエスの立場より看て貧者は福ひなのである。而して其理由として「神の國は汝等の所有なれば也」とある。此世に在りて何物をも有たぬ者に來世は與へらるべしとの事である。勿論貧其物は來世獲得の必然的理由とはならない。然し乍ら、貧者の富者よりも天國に入り易きは何人も能く知る所である。イエス御自身が言ひ給ふた、

富者の神の國に入るは如何に難いかな

と(路加傳十八章二十四節)。而して此意味に於て貧者は正に福ひなるのである。貧は人が天國に入るの刺戟となることがある。其妨害とはならない。天國に入らんと欲する者に取りては、貧は富よりも遙かに良き境遇である。

然し乍ら、貧にも深淺がある。より深い貧とより淺い貧とがある。而して物に乏しき貧はより淺い貧である。世には物資の缺乏に勝さるの貧があるのである。卽ち德性缺乏の貧がある。自己に顧みて何の善をも發見する能はざる貧がある。而して

イエスが茲に言ひ給ふ

心の貧しき者　とは此種の貧者を指して稱ふのである。心は此場合に於ては「心靈」と譯すが當然である。心の最も深い處、人が神に接觸する所、其所が彼の靈（pneuma, spirit）である。而して心靈に於て貧しき者とは、其の奥底に於て貧しき者との謂である。此世の所謂貧者は身の貧者である。身に屬ける物に乏しき者である。然し乍ら、イエスが茲に福者なりとて擧げ給ふ貧者は心靈の貧者である。身に屬ける物に乏しきは勿論、更に其上に心靈に屬けるものに於ても乏しき者である。而して心靈の富と云へば勿論無形の富であつて、或ひは知識である、或ひは智慧である、殊に德である。故に心靈の貧者と謂へば、智德兩つながらに於て乏しき者を謂ふのである。心靈の貧者、自己の非學を自覺し、非德を確認する者、自己に省みて其裏に何の善をも發見する能はざる者、斯かる者は福ひなり、仕合せなり、神に祝されたる者なりとイエスは茲に言ひ給ふたのである。

驚くべきは實にイエスの此言葉である。彼の立場より見て、身の貧は福ひなりと

言ひ給ひたればとて、其は解し難い言葉ではない。然し乍ら、心靈の貧が福ひであるとは、謎語も殆ど其極に達して居るやうに思はれる。

實に深遠なる語は謎語の如くに聞える。天の高きに昇らんと欲する者は、地の低きにまで降らざるべからず。「降りし者は卽ち諸の天の上に昇りし者也」とある（以弗所書四章十節）。天國の富者たらんと欲する者は地上に赤貧者たらざるべからず。而して貧の極は身の貧に非ずして、心靈の貧である。赤貧洗ふが如しと言ふ者も時には俯仰天地に恥ぢずと言ふ。斯く言ふ者は身は貧すれども心靈は甚だ富める者である。貧に內なると外なるとが有る。心靈の貧者は內に何物をも有たない者である。其實例は使徒パウロである。彼は曰ふた、

善なる者は我れ、卽ち我肉に居らざるを知る、そは願ふ所我に在れども善を行ふことを得ざればなり、……嗚呼我れ困苦める人なる哉

と（羅馬書七章十八、十九……廿四節）。パウロは世の所謂義人と異なり、俯仰天地に恥ざるの人ではなかつた。彼は己れに省みて衷に何の善き者をも見なかつた。彼は心靈の貧しき者で

あつた。誇るべきの智慧なく、倚るべきの德なく、彼の自白せるが如く「彼は罪人の首」であつた。而して神の前に立て謙虛の底にまで引下げられし彼は、キリストに在りて其の諸德を認むるを得て榮光の天にまで引上げられたのである。故に言ふ「心靈の貧しき者は福ひなり、天國は卽ち其人の有なれば也」と。淸貧の故を以て誇る世の所謂潔士、品性の高潔を以て自から足れりとする所謂基督敎紳士、信仰の正しきを以て神に特別に近き者なりと信ずる敎會信者、彼等は皆な心靈の富める者である。身に一物を有たずと雖も心に許多の物を有つ者である。而してイエスが神に祝まれたる者と認め給ふ者は、其心靈に於て一物をも有たざる者である。實にイエスは曾て心靈の貧富を對照し、譬を設けて語り給ふた、

茲に二人の人あり、祈らんとて神殿に登りしが、其一人はパリサイの人、一人は稅吏なりき。パリサイの人起立て自から如斯祈れり、曰く、神よ、我は他人の如く强奪、不義、姦淫を行はず、亦此稅吏の如くにも有らざるを感謝すと。稅吏は然らず、遙かに立ちて天をも仰ぎ見ず、其胸を打て神よ罪人なる我を憐み給へと

言へり。我れ汝等に告げん、此人は彼人よりも義とせられて家に歸りたり、夫れ自己を高くする者は低くせられ、自己を低くする者は高くせらるべし（路加傳十八章九節以下）。茲にイエス御自身の言葉として、馬太傳五章三節の最も善き註解が與へられたのである。我等は實に之れ以外に我等の註解を試むるの必要は無いのである。心靈の富めるパリサイ人と其貧しき稅吏、而して所謂淸廉潔白のパリサイ人は斥けられて、胸を打ちて己が罪人なるを自白せし稅吏は納けられたのである。聖人、義人、潔士、烈婦の徒が天國に入ると云ふは誤認である。彼等ではない、マタイのやうなる稅吏、ラハブのやうなる娼妓、天國に入る者は彼等である。驚くべきかなイエスの此言葉。彼の福音の世に說かるゝこと茲に千九百年、敎會は無數に存し、基督敎文明の世に徧き今日、ガリラヤ湖畔に於て初めて唱へられし單純なるイエスの天國の福音は、今猶ほ不可解の言葉として存するのではあるまい乎。今日の所謂基督信者も亦强奪、不義、姦淫を行はずと言ひて神の前に立つパリサイの人の類であつて、若し罪人なるを自認して敎界の公見を憚り單獨の隱密を求むる者があ

れば、斯かる者は奇矯なり偏屈なりと稱へられて彼等の間に嘲けらるゝではない乎。

余輩は神に感謝す、ガリラヤ傳道に於けるイエスの開口第一番の言葉の、パリサイの人、民の祭司、長老、學者等を批難すると同時に、自己の不義不德に泣く罪人を庇護する言葉なることを。

其人の有である、天國は　言葉の順序に注意して讀むべきである。「其人」が前にして「天國」が後である。僅少の差違ではあるが、然し、イエスの此一言に於ける主要問題の何たる乎が、言葉の前後に由て判明るのである。イエスは玆に心靈の貧者の祝福に就て宣べ給ひつゝあるのである。而して其人の如何に福ひなる乎、其事は彼の與かる報賞の如何なる乎に由て判明るのである。天國は當時の人の何人も入らんと欲せし所であつた。而して誰が之に入るを得ん乎とは、當時の學者宗教間家の間に討議せられし大問題であつた。誰が、誰が天國の市民たるを得る乎とは、當時の緊急問題であつた。而してイエスは大膽に此問題に答へて言ひ給ふた、

心靈の貧者、彼が天國に入るのである。他の者ではない。祭司ではない。神學者

ではない。宗教家ではない。勿論富者ではない。アブラハムよりの血統を誇るユダヤ人ではない。俯仰天地に恥ざる義人ではない。自己の罪を認むる者、自己の衷心に何の善をも認めざる者、自己が缺點の多きを恥ぢて頭を擡げ得ざる者、天をも仰き見ずして其胸を打て神よ罪人なる我を憐み給へと言ふ者、其者、其人が天國に入るのである

と。罪人の辯護の言葉にして之よりも有力なるものは無いのである。イエスは玆に此世の君子、義人、高士等を悉く掃除けて、其場所に罪人の首を立たせ給ふたのである。

「其人の有である」、「ある」である、「あらん」ではない。天國は今既に心靈の貧者の有であるとのことである。來世に於て彼の有たらんと言ふのではない。今日、今、玆に其人の有であるとの事である。而してイエスの此言葉は事實であるのである。心靈の貧者は今、玆に天國に在るのである。人のすべて思ふ所に過ぐる平安は彼の有である。彼はイエスを友として有ち、其義、其聖、其贖を己が有として有ち、天國

をして天國たらしむる其事實、其實體、其光明、其生命、彼は今茲にすべて是等のものを有つのである。彼に勿論今猶ほ哀哭がある、熱き涙がある、罪の悔改の苦痛がある。而して彼の前には渡るべき死の河が横たはる。然し乍ら、其れあるに係はらず天國は今既に彼の有である。彼は未だ天國を其完成されたる形態に於て有たない。然し乍ら、天國に入るの鍵は既に業に彼の手に附された。彼は最も確實なる意味に於て、今日既に天國の所有者である。

沈思默考、汲んで益々罄きざるはイエスの言葉の意味である。是れまことに神ならでは語る能はざる言葉である。

祝福なるかな、貧しき者は、心靈に於て。其人の有である、天國は。

と。此一言を以て此世の倫理も道德も悉く顚覆せられて、之に代りて天國の福音が人の子の間に顯はれたのである。

第三 平和の祝福

福ひなり、平和を求むる者は、蓋、其人は、神の子と、稱へらるべければ也（五章九節）

平和を求むる者 とは如何なる者である乎。人と人と、又は國と國との間に平和の破れし場合に、二者の間に立て平和を計る者であるとは、大抵の信者より余輩が聽く此言辭の解釋である。「平和を求むる者」とは不和を調停する者、仲裁者の勞を取る者、卽ち、日露戰爭の時に北米合衆國大統領ルーズベルト氏の立ちし立場に立つ者であるとは、イエスの此言辭に對する普通の見解である。

而して余輩と雖も、此見解の誤りたる者にあらざるを知る。イエス御自身が此意味に於ての平和主義者であつた。彼に由て神と人との間に横はりし敵意は取除かれたのである。

夫れ汝等は前に神に遠かり、心にて其敵となれる者なりしが、神、今キリストの死に由り汝等をして己と和がせ、己が前に立たしめんとす

とある（哥羅西書一章廿一、廿二節）。又イエスに由りて人と人と、ユダヤ人とギリシヤ人と、國民と國民とが、眞正の意味に於て和ぐことが出來るのである。

彼は我等の和なり、二者を一つとなし、寃仇となる隔の籬を毀ち給ふ

とある（以弗所書二章十四節）。故にイエスを稱して契約の仲保又は新約の仲保とも言ふ（希伯來書八章六節、同九章十五節）。又

神と人との間に一位の仲保あり卽ち人なるイエスキリストなり

とありて、キリストの職務は主として神人間の平和を計るに在るが如くに錄されてある（提摩太前書二章五節）。

如斯くにして仲保はイエスの大事業でありしが故に、彼の弟子たる者も亦、仲保、仲裁、調停を以て事業となすべきことは余輩の玆に言ふまでもない。信者が嫌ふものにして爭鬪の如きはない。彼はすべての手段を盡くして之を取除くべきである。

行し得べき限りは力を竭してすべての人と睦み親しむべし

とある（羅馬書十二章十八節）。爭鬪の開けし場合に、信者が全力を竭して平和の克復を計るは

勿論の事である。

然し乍ら、平和は爭鬪の調停を以て盡きない。仲保と云ひ、仲裁と云ひ、平和事業の一面に過ぎない。破れし平和を恢復するのみが平和ではない。平和は平和を擾されざらんとする。眞に平和を求むる者は不和に近づかざらんとする。美術家が醜容を厭ふが如くに、平和者は不和爭鬪を厭ふ。之に接するは彼に取り大なる苦痛である。彼は自から之を避けんとする。仇恨、爭鬪、分爭、結黨と聞いて彼は堪えられず感ずる。彼の本能性に逆ふ者にして平和の擾亂の如きはない。

而して是がすべての分爭に對するイエスの態度であつたのである。平和の主なる彼は如何なる黨派にも與し給はなかつた。結黨の動機は敵對である。對峙すべき一つの黨派があつて、玆に他の黨派が起るのである。平和の行はるゝ所に黨派は起らない。黨派の存在其物が仇恨伏在の何よりも良き證據である。イエスはパリサイ派にも屬し給はなかつた。サドカイ派にも入り給はなかつた。ヘロデ黨にも與し給はなかつた。

イエス自己を彼等(黨人)に托せざりき、蓋、人を知り、人の心を知りたれば也とある(約翰傳二章廿四、五節)。彼は全然無政黨、無宗派であつた。彼は今の多くの基督信者が爲すが如くに、宗派間の調和を計らんがために自ら宗派に入り給はなかつた。宗派は彼の本能性に合はなかつた。生れながらにして平和を求め給ひし彼は、自己を否認せざる以上は宗派に入らんと欲するも能はなかつた。余輩はイエスの純然たる無政黨的、無宗派的態度に於て、平和を求むる者の眞實の模範を見るのである。

而してイエスの如き者に朋友の尠き、其理由は之を探るに難くはない。神を離れて、人は黨派の人たらざらんと欲するも能はないのである。而して人の中に在りて、イエスのみが眞に不羈獨立の人であつたのである。人の中に彼に儔ひすべき無黨派の人は一人もなかつた。故に全然黨を離れし彼には、政治的にも宗教的にも天が下に枕する處は無かつた。性來平和の人なりし彼は、止むを得ず孤獨の人であつたのである。(『研究十年』第百一頁以下「イエスは何故に人に憎まれし乎」の一篇を參考すべし)。

玆に於て「平和を求むる者」の如何なる者であるかが稍明瞭になるのである。啻に平和の恢復を計る者に非ず、分爭に近寄らざる者、性來の平和追求者、不和を厭ひ、分爭結黨を諱み嫌ふ者、「平和を求むる者」とは斯かる者である。

希臘語の εἰρηνοποιός を「平和を求むる者」と譯したのが、抑々誤解の始めであると思ふ。支那譯の聖書には施平和者と譯してある。「施す」は「求むる」よりも少しく優りたる譯字である。然し乍ら、「平和を行ふ者」と譯するのが更らに大なる改良であると思ふ。平和を實行に顯はす者、其行爲全體が平和的なる者、イエスが福ひなりと言ひて祝し給ひし者は斯かる者であると思ふ。或ひは更に進んで「平和性の者」と譯するならば、原語の意味に最も近くあると思ふ。

ロビンソン氏著『新約聖書字典』二一六頁を見よ。六十年前の著作なりと雖も、定義の明瞭にして簡潔なるに於ては今猶ほ比類尠き好著なりと信ず。One disposed to peace, peaceful, opposed to strife とある、(平和に傾く者、平和性の者、爭鬪に反對する者)とある。

平和性の者は福ひなりとの事である。而して此性たるや、是を自然性として受くるも、又は信仰に由り聖靈の賚賜として受くるも、其祉福たるや同じである。要は平和が我等の性質となるにある。義務として之に從ふに非ず、訓誡として之に服するに非ず、性質として自ら之を行ふ者、其人は福ひであるとのことである。

其人は神の子と稱へらるべければ也 神は元元平和の神である。

平和の神汝等すべての人と偕に在さんことを祈る。

とある（羅馬書十五章三十三節）。又

平和の神自から汝等を全く潔くし云々

とある（テサロニケ前書五章廿三節）。又

羊の大牧者なる我等の主イエスキリストを死より甦らしゝ平和の神

とある（希伯來書十三章二十節）。故に斯神の子と稱へられんが爲には、自身も亦平和の人とならなければならない。神は眞個の意味に於て不偏不黨である。而して神の聖意を身に體したる者は黨派に入らんと欲するも能はない。宗派は基督者の大禁物である。之

に入り之に屬するは、神の明かなる聖意に逆らふのである。然るに事實は如何に。盜む事姦淫する事を侃々諤々として責立つる基督信者が、宗派と云ふ信仰的黨派に入りながら、敢て大なる罪惡（余輩は之を罪惡と稱して憚らない）を犯しつゝあるとは感じないのである。而して我等は分爭結黨（今の敎會なる者は殆ど其すべてが結黨に由て成りたる黨派の類ではあるまい乎）の苟合、汚穢、好色と同じく罪であることを忘れてはならない（加拉太書五章二十節）。宗派の人は神の子と稱へられずと謂ふことが出來る。

「稱へらる」とは啻に名稱を附せらるべしとの事ではない。聖書に於て「稱へらるべし」とあるは「事實として認めらるべし」と云ふことである。故に稱へらるゝ前に事實があるのである。神の子と稱へらるゝ前に神の子とせらるゝのである。神に在りては名實の差別はない。神の性なる平和性を受けて、人は神の子として認めらるゝのである。

イエス言ひ給はく、祝福されたる者なる哉、平和の性を賜はりし者は、蓋、其人

は神の子として認めらるべければ也と。

世は平和の人を稱して臆病者、隱遁者、非社交的人物となすならん。然れども平和の主なるイエスキリストは言ひ給ふ

其人は神の子と認めらるべければ也

と。然れば何をか恐れん、誰をか憚からん。

第四 信者と現世

馬太傳第五章十三節—十六節

信者は地の所屬ではない、天の所屬である。世の所屬ではない、キリストの所屬である。然し乍ら、彼は今猶ほ現世に在る者である。故に現世と深き關係に於て在る者である。信者が現世に對して採るべき態度如何、信者は現世のために何を爲すべき乎、又何を爲し得る乎、是れキリストが玆に敎へ給ふ所である。

イエスは言ひ給ふた「汝等は地の鹽なり」と、又「汝等は世の光なり」と。

汝等は地の鹽なり

地は下の世界である。上の天に對して稱ふ。地も亦神の造り給ひし者である、故に善きものである。然し乍ら、肉の人を宿す所なるが故に甚だ腐敗し易くある。實に腐敗し易きは地の特性である。

時に地、神の前に亂れて暴虐地に滿ちたりとは、既にノアの時に於ける其狀態であつた。(創世記六章十一節、邦譯に「世」とあるは誤譯である)。又

エホバ天より(地の上なる)人の子を瞰たまひしに、彼等は悉く腐れたりとある(詩篇十四篇二、三節)。地は暫時的のものである。天の如くに永久的のものでない。故に腐れ易くある。故に腐敗を止むるために常に防腐劑を要するのである。

鹽は昔時の唯一の防腐劑であつた。鹽に由て食物の味は保存せられ、其腐敗は防遏せられたのである。而して信者は腐敗し易き此地の防腐劑であるとの事である。

事は至て平明である。然し凡て深遠にして普遍的なる事は平明である。イエスの弟子に由て地の味は保存せられ、其腐敗は止められるゝのである。信者が信者の職務に忠實ならずして、地の腐敗は其底止する所を知らないのである。

地は腐れ易くある。然し乍ら、腐れ易きは其中に生命があるからである。生命の無い所には腐敗は無い。腐敗は生命の徵候である。

地に生命のあることは事實である。福音の到らざる所にも道德がある、人倫がある。福音無くして道德あるなしと云ふは大なる過誤である。福音以前に希臘羅馬に、支那日本に、善き高き道德があつた。又福音以外に、佛教に儒教に神道に清き深き倫理がある。眞理と生命とは基督敎のみに限らない。全地は神の榮光を現はして居る。眞、善、美の或る反照は之を地上何れの所に於ても認むることが能る。而して是れ悉く神の賜物であつて、保存し、尊重し、感謝して受くべきものである。

然し乍ら地の生命は甚だ腐れ易くある。其新鮮なる期期は短く、其潑溂たる期間は少時である。地上の生命は忽焉にして腐敗し、暫時にして硬化す。恰も人生の短かきが如くである。其繁榮は槿花一朝の夢である。

茲に於てか鹽の必要があるのである。既存の善事を保存し、其美を發揚し、之をして更に地の涵養を助けしむる或者の必要があるのである。而して神の生命の言を、靈に受けし信者が、地の此必要に應ずるのであるとの事である。信者に由りて福音以外の諸德、信者以外の諸善が保存せられ、發揮せられ、流布せらるとの事である。而して此事は世に隱れなき事實である。キリストの福音に由りて、舊道德と舊信仰とは眞正の意味に於ての復活を見るのである。イエスは此事を敎へて直ぐ後で曰ひ給ふた、

我れ律法と預言者とを廢る爲に來れりと思ふ勿れ、我れ之を廢る爲に來りしに非ず、成就せん爲なり

と(五章十七節)。而して此事たる舊約の律法と預言者とに限らないのである。凡の宗敎又

は道德に於て然るのである。希臘羅馬の舊き道德も、印度の佛敎婆羅門敎も支那の儒敎も、彼斯の火敎も、イエスの福音の鹽に接して其眞價を認められ其眞髓を發揮せられたのである。東洋諸國に於て福音は儒敎と佛敎とを廢せずして、却て之を起したのである。今や最も該博なる佛敎研究は佛敎國に於て行はれずして、基督敎國に於て行はるゝのである。今や最大の佛敎學者は印度又は日本に於てあらずして、英國又は佛國又は獨逸に於て在るのである。モニエー・ウイリヤムス氏の如き、マクス・ムラー氏の如き、其他世界的佛敎學者の多數は、誠實なる基督信者であつたのである。而して又我國の神道に就てさへも、アストン氏の如き、ノックス氏の如き、又自身は基督信者に非ずと稱するも而かも同じ基督敎國の產なるチャムバレーン氏の如きが、世界的眼光を以て其研究に從事し、比較宗敎學的に其蘊奧を探りて底く之を世界に紹介せしに照らして見ても、キリストの福音の亦決して神道の破壞者でないことを知るに足るのである。

而して余輩は亦同一の事を宗敎以外の事に於て見るのである。日本國に於て二宮

尊德、上杉鷹山、日蓮上人等の世界的價値と偉大とを認めて、之を世界に紹介した者は何人である乎。彼等は皆な明白に自身はイエスの弟子なりと表白する人等ではない乎。佛敎徒には外敎徒なりとて憎まれ、自稱愛國者等には國賊なり逆臣なりと唱へられし基督信者が起て、日蓮上人はモハメットに勝り、ルーテルに匹敵すべき大宗敎家である、二宮尊德は萬國の敬崇を惹くに足る所の農聖人であると言ひて、日本人の精神的偉大を世界に對つて鳴らした者ではない乎。イエスの弟子は、孔子の弟子又は釋迦の弟子を憎みて彼等を葬り去らんと欲する者ではない。其正反對が事實である。鹽が食物の味を保存するが如くに、イエスの弟子は他宗他敎の眞理を保存し、且つ發揮するのである。佛敎も儒敎も、其他のすべての宗敎も、イエスの福音に由て永く地上に保存せられて、其放つべき光を放つのである。

基督敎は忠孝道德の破壞者なりとの邦人の套語に就ては、玆に之を答辯するの必要はない。忠孝道德を破壞する者は基督敎ではない。忠孝道德は基督敎を俟たずして破壞されつゝあるのである。收賄の故を以て君子國の名を世界に向つて辱かしめ

し者は基督信者では無かつた。放埒の故を以て本山の存在を危くせしものは基督教の僧侶では無かつた。忠孝道徳を喧しく口にする者必しも忠臣孝子では無い。能く國民の義務を盡す者、其人が眞正の忠臣である。能く家名を辱かしめざる者、其人が眞正の孝子である。其意味に於てイエスの弟子は、釋迦の弟子又は孔子の弟子に勝ることあるも、劣ることなき忠臣孝子であると思ふ。主の主なる眞の神に事ふる者が、斯世の君に對して不忠でありやう筈はない。愛なる神を父として有つ者が、肉體の父母に對して不孝なる筈は無い。忠孝道徳破壞の故を以てイエスと彼の福音とを誹謗して止まざる我國の道徳家は、イエスの福音の全然排斥せらるゝ所に於て忠孝道徳の歳々に廢れ行く其理由を説明すべきである。

汝等は地の鹽なりとイエスは其弟子等に對つて言ひ給ふた。即ちイエスの弟子等は斯世に在りて萬般の善事の保全の任務に當るべき者であるとの事である。單に腐敗を防止むるに止まらない、能く味を保存する。鹽の用は茲にある。信者の用も亦茲に在るのである。保全と防腐、新生命を供するに先だちて舊生命を保存する。神

は最大の經濟家である。神は御自身の能力を濫用し給はない。彼は其獨子を以て新生命を人に賜ふに先だちて、彼が前に斯世の聖人又は義者を以て賜ひし舊生命を保存し給ふ。

少しも失はざるやうに其餘の(パンの)屑を拾集めよ

とイエスは曾て弟子等に言ひ給ふた(約翰傳六章十二節)。殘肴の拾集保存は信者の役目の半分である。

汝等は世の光なり

上の天に對して下の地がある。光明の來世に對して暗黑の現世がある。而して信者は下の地に對しては鹽であり、暗黑の現世に對しては光であるとの事である。鹽としては既に地に在る善きものを保存し、光としては未だ世に有らざる天の光を加ふ。舊を保存するを以て滿足せず、更に進んで新を增進す。信者は保守家であると同時に進步家である。保存に偏らない、然ればとて進步にも偏らない。ユダヤ人の

如くに單に舊に縋らない。然ればとてギリシャ人の如くに唯新のみ是れ追はない。守るべきを守り、進むべきに進む。地の鹽であると同時に世の光である。保守進歩の兩主義を一身に體する者である。

イエスの弟子は世の光である。文明の先導者である。知識の開發者である。靈光の供給者である。此事に就て賢を懷く者は無い。世の所謂基督敎に迷信が無いではない。所謂基督敎會なる者が頑迷無智の巢窟と化したる事は幾回もある。然れども過去千九百年間の人類の歷史に於て、イエスの弟子が光明の炬火の把持者であつたことは、如何なる人と雖も疑はんと欲して能はざる所である。信仰道德の事に於てのみではない。科學の事に於て、產業の事に於て、思想のことに於て、美術のことに於て、パウロの言辭を藉りて言ふならば、凡そ眞なること、凡そ敬ふべきこと、凡そ義しきこと、凡そ愛すべきこと、凡そ善き聞えある事に於て、常に荆棘の開拓者として、又新光明の注入者として進歩の先陣に立ちし者の、ナザレのイエスの忠實なる弟子でありしことは、天空に太陽が耀くが如くに炳乎として明瞭である(腓立比書四章八節)。世界の文明國を稱して一名之を基督敎國と呼ぶは、決して理由の無い事では無い。我は世の光なりとイエスは言ひ給ふた。而して信者はイエスに代りて世を照らす者である。勿論イエスの如くに自から光を放つ能はずと雖も、而かも各自の信仰の量に循ひ彼の光を反射する者である。イエスの光を身に受けたる彼の弟子が無くして、世は夙く既に常暗の世と化し去つたであらう。

信者は地の鹽であり又世の光であると云ふ。然し乍ら信者自身が鹽であり、又光であるのではない。彼をして鹽たらしめ又光たらしむる者は、彼の衷に宿り給ふ彼れ以外の「或者」である。「彼」が彼の衷に宿り給ふ間は、彼は實に鹽であり光であるのである。乍然「彼」にして一朝彼を離れ給ふ場合には彼は味を失ひたる鹽となり、又光の失せたる燈となるのである。故に信者は自ら耀かんと欲して耀くことは出來ない。彼は彼の衷に輝く大光をして、故障なく外に向つて耀かしむれば足りるのである。イエスを離れたる信者は味を失ひたる鹽であつて、後は用なく、人に踐まれんために外に棄てらるゝのみである。自己が耀くにあらずして、自己が衷に宿り給

ふイエスが耀くのであるが故に、人々は信者の善行を見て、信者を譽めずして、イエスの父にして信者の父なる天に在す父を榮むるのである。イエスの弟子と云ふは、孔子の弟子又はソクラテスの弟子と云ふとは全く其趣を異にする。イエスの弟子はイエスに效ふ者たるに止まらず、イエスの宿る所の者である。基督者である。小基督である。故にキリストを離れては無に等しき者である。イエスの弟子が地の鹽であり、世の光である其原由は、全く彼の衷に宿り給ふ生命の主にして世の光なる主イエスキリストに在るのである。故に我等有力なる鹽となり、又强大なる光と成らんと欲はゞ、信仰を以て益々確實にイエスの内在を祈求むべきである。

第五 天國の律法

馬太傳第五章十七節以下

「律法はモーセに由りて傳はり恩寵と眞理はイエスキリストに由りて來れり」とある(約翰傳一章十七節)。故にキリストの福音に律法は無いと云ふならば誤謬である。キリストの福音にも律法がある。モーセのそれよりも遙かに深い且つ聖い律法がある。イエスは茲に天國の律法を宣給ひつゝあるのである。使徒ヤコブは之を稱して自由なる全き律法といふた。束縛るための律法に非ずして、釋放つための律法である。又强ひられて行ふ律法に非ずして、愛に勵まされて行ふ律法である(雅各書一章廿五節)。

イエスの宣たまひし天國の律法は、モーセの律法を壞ちて其上に建てられたる者ではない。イエスは破壞者で無い。彼は舊を壞ちて其上に新を築き給はない。彼は舊をして其精神を發揮せしめ、新として之を世に供し給ふ。蕾を壞ちて新たに花を造り給はず、蕾をして花として開かしめ給ふ。律法と預言者とを廢ず之を成就し給ふと云ふは此事である。方今の哲學の言辭を以て言ふならば、イエスはモーセの律法を廢棄し給はず、之を進化せしめ給ふ。モーセの律法の精神を發揮せしめて、之を其眞正の意味に於て行ふことを得しめ給ふ。

今試に之をモーセの律法の或る條項に就て例證せん乎、十誡第六條に曰く「汝殺す勿れ」と。實に然り。然し乍ら殺すと云ふことは肉體の生命を奪ふことに止まらない。故なくして其兄弟を怒ること、其事も亦殺すことである。憤怒、仇恨、誹譏、讒謗、是れ皆な殺人の罪である。殺人は外の行爲では無い、內の心狀である。人を憎む者は彼を殺す者であると。イエスは斯くの如くに十誡第十條を解釋し給ふたのである。

然らば十誡第七條は如何？「汝姦淫する勿れ」とある。然し乍ら姦淫するとは止に肉體を汚すことではない。邪念を以て婦(他人の妻)を見る者は、心中すでに姦淫の罪を犯したのである。饕餮、醉酒、放肆、汚穢、是れ皆な姦淫の罪である。姦淫も亦殺人と同じく外の行爲ではない、內の心狀である。情性の汚れたる者はすべて姦淫を犯す者であると。イエスは如斯くに十誡第七條を解釋し給ふたのである。

同一の筆法を以て亦十誡第九條をも解釋すべきである。虛妄の證據を立つることは、法廷に出て法官と同胞とを欺くことばかりでない。誓約を立つること、其事が神と

他人と自己とを欺くことである。明日あるをさへ知らざる人が如何で誓約實行を確證するを得んや。彼の爲し得る事は唯「主もし許し給はゞ我れ此事又は彼事を行さんと言ふ」のみである。十誡第九條を完全に守らんと欲せば、普通此世に行はるゝ誓約は絕對的に之を廢止せざるべからずである。

更に十誡以外の律法に就て言はん乎、復讐は絕對に之を禁ずべきである。人若し我が右の頰を批たば、亦左の頰をも向けて彼をして之を批たしむべきである。絕對的無抵抗主義、天國に於ては、軍備、警察は勿論、民法又は刑法も亦在るべからずとの事である。

惡に抗せざるに止まらず、更らに進んで惡人をも愛すべきである。敵と味方との區別を立つべからず、味方を扱ふが如くに敵を扱ふべし。神が其日を善者にも惡者にも照らし、其雨を義人にも罪人にも降らし給ふが如く、一視同仁、以て自己を愛する者を愛するが如くに、自己を憎む者又虐遇まし迫害る者をも愛すべきである。

以上を以て天國の律法は盡きたりと言ふのではない。然し乍ら、以上に依りて天

國の律法の一斑を窺ふことが出來るのである。そのモーセの律法と異なる點、その之に優るの點は以上の引例に依て推知することが出來る。十誡のすべて、其他舊約のすべての律法は以上の範例に由りて解釋せらるべき者である。

依て知る、イエスが此處に宣たまひし言の天國の律法のすべてにあらざることを、同時に又天國の律法の箇々別々の律法より成る者にあらざることを。律法は一である。一の律法を種々樣々の場合に適用せんとして、幾多の法規法條が在るのである。此事を最も明かに言表はしたのが使徒ヤコブである。

人、律法を悉く守るとも若し其一に躓かば是れ全部を犯すなり。それ姦淫する勿れと言ひ給へる者亦殺す勿れと言ひ給ひたれば、汝等姦淫せずとも若し殺すことをせば、律法を犯す者となる也(卽ち姦淫の罪をも併せ犯す者となる也)

とある(雅各書二章十、十一節)。天國の律法は之を一括して考量へなければならない。是は特に殺人を誡め亦特に姦淫を誡めたる律法ではない。是れは罪を其本源に於て糺明すための律法である。故に此罪彼咎を箇々別々に鞫くための律法でない。

此事を心に留めて、所謂「山上の垂訓」を以て人の過誤を鞫くための法文として用ゆることの、如何に不當である乎が判明る。イエスは玆處に世の所謂民法、又は刑法を定め給ふたのではない。縱し又人ありてイエスの此律法を以て他の人を鞫かんとするも其は到底不可能である。其故如何にとなれば、人は何人も此律法を以て他の人を鞫くの資格が無いからである。姦淫の故を以て人を鞫かんと欲する者は、自身未だ曾て一回も邪念を以て婦人を見たことの無い者でなくてはならない。且又律法は一であつて殺人も亦姦淫の罪に問はるべき者であり、而して故なくして人を怒る者は殺人の罪を犯したる者であるとの事であれば、曾て一回たりとも憤怒の罪を犯したる者は殺人の罪に問はるべき者であるが故に、斯かる人は他の人が姦淫の罪を犯したればとて、之を鞫くの資格を有たない者である。若し人ありてイエスの宣たまひし此天國の律法を以て他の人を鞫かんとするならば、其人は右の頰を批たれし場合には左の頰をも轉らして之を批たしめ、裏衣を要求せらるゝ場合には外服をも提供し、人の彼に求むる者あれば己が所有のすべてを與へて惜まざる者でなけれ

ばならない。若し基督信者が此明白なる事實を認めしならば、彼れが今日まで臆面もなく犯し來りし、イエスの「山上の垂訓」を以て他人を鞫きて得々たるの、恐るべき憎むべき罪より免がるゝ事が出來たであらう。怒ることの殺人なるを忘れ、吝むことの貪婪なることに氣が附かずして、己が犯さゞる(幸にして)罪を他人が犯すを見れば旗鼓堂々として之を責むるが如き、是を僞善の行爲と稱せずして何をか稱せんである。イエスの唱へ給ひし天國の律法を以て所謂教會法(ecclesiastical laws)なる者を制定し、之を以て此世の政府が社會の罪人を審判くが如くに信者を審判くはイエスの聖法の大なる濫用と稱せざるを得ない。我が來りしは世を審判かんために非ず世を救はんため也と彼は御自身に就て言ひ給ふた(約翰傳十二章四十七節)。然るを彼の宣たまひし律法を以て人を審判くが如き、是れ殺人以上、姦淫以上の罪と稱せざるを得ない。

然らば何のための天國の律法である乎? 他人を鞫くための律法ではない、自己を鞫くための律法である。人は何人も之を以て自己を探り、自己を糺明し、自己の何たる乎を確むべきである。爾するならば人は何人も推諉べきなくして、彼はパウロの如くに

善なる者は我れ、即ち我肉(肉的自我)に在らざるを知る

と神の前に白狀せざるを得ざるに至るのである(羅馬書二章一節同七章十八節)。而して此苦しき白狀に由りて、彼はキリストに顯はれたる神の赦罪の福音に接し、茲に初めて天國の市民たるの第一の資格即ち心靈の謙下を得て、平和の生涯に入る事が出來るのである。イエスは彼の救濟に與らざる者と雖も實行し得る律法として、之を宣給ふたのではない。一は之を以て各自己を糺彈せしめ、己が罪を自覺して神の子の救濟に與からしめんがために、二には斯の救濟に與りし者が聖靈の恩化に由り終に實行し得るに至るものとして、此完全無缺、純粹無雜の律法を宣たまふたのである。

天國の律法である、福音の一部分としての律法である。故に是は福音の立場より解釋し、又福音の精神を以て適用すべき者である。

我れ矜恤を欲みて祭祀を欲まず

とは一言以て明かに神の聖意を言表したるものである（馬太傳九章十三節、同十二章七節、何西阿書六章六節）。神は人が神に對する時に此精神を以てせんことを欲み給ふ。又神御自身が人に對する時にも此精神を以てし給ふのである。神は人が他人に對して矜恤を施さんことを、御自身に對して祭祀を奉らんことよりも欲み給ふのである。而して亦御自身に在りても矜恤を人に施すことを、人が御自身に對して役へまつることよりも欲み給ふのである。即ちイエスキリストの御父なる眞の神に在りては、與ふるが前にして受くるが後である。役ふるは役へらるゝに優さるの幸福である。隨て神の立場より見て、信仰は道德よりも肝要である、憐憫は正義よりも貴くある。故に天國の福音を宣給ふに方て、イエスは先づ天國の律法を宣たまはずして、之に入る者の祝福を宣たまふたのである。「福ひなる哉」とは彼の開口第一番の言葉であつた。而して此事を心に留めて、五章十七節以下天國の律法を以て所謂「山上の垂訓」の骨子となすの、甚だ誤れるを知ることが出來る。トルストイ伯の基督教の解釋の根本的誤謬は茲に在ると言はざるを得ない。彼はイエスの教訓の重心を彼の宣たまひし律法に置て、福音

の全景を見損ふたのである。而已ならず、彼の此誤解に由りて福音は福音にあらずして重き重荷と化するのである。即ち肉の人間に不可能事を強ひて其罪を鳴らすに止まつたのである。然し乍ら、イエスは如斯くにして天國の律法を我等に提供し給はなかつた。彼は福音の一方面として之を宣たまふた。矜恤は彼の第一の要求である。而して第一に矜恤を要求し給ふ彼は心の柔和なる者にして、人に矜恤を施すを以て最大最後の目的となし給ふ者である。

我れ矜恤を欲みて祭祀を欲まず

と彼は重ねて言ひ給ふた。矜恤は彼の生命の緯であり又經であるのである。

斯かる矜恤の主の定め給ひし律法である。之を律法的に解釋するの非なるは言はずして明かである。天國の律法は矜恤を施すための律法、矜恤に導くための律法、矜恤んで適用すべきための律法である。其事を辨へずして教會は恐るべき神の律法を地上に布く爲の機關であるかの如くに思ひ、基督信者とはキリストに代りて地上に人を鞫く者であると思ふが如き、是れ聖書の大濫用、福音の大誤解と言はざるを

得ない。

我れ矜恤を欲みて祭祀を欲まず。

聖書解釋の鍵は玆に在る。之を以てして聖書の寶庫を開かん乎、其中より生命の甘泉は流れて止まず、好き眞珠と値高き眞珠とは其中に山積し、汲めども涸ず、掘れども盡きず、我等は生きて永遠に至り、富んで其終る所を知らないのである。

第六　馬太傳第五章二十八節の眞意

性慾の罪に就て語るは決して快き事ではない。之に大なる危險がある。罪を語て却て罪を想起さしむるの危險がある。我等は深き注意を以て此種の研究を爲さなければならない。

乍然、性慾の罪に關する研究は全然之を避くることは出來ない。之は此世に最も

有勝なる罪である。人は此罪に於て潔白であつて初めてすべてに於て潔白であるのである。姦淫は最も隱微なる罪である。之を排除するに深き思慮と慧き手腕とを要するのである。

何をか姦淫と云ふとの問題に對して、イエスは斯う答へ給ふたと馬太傳は傳へて居る。卽ち

凡そ婦を見て色情を起す者は中心已に姦淫したるなり

と（五章二十八節）。若し此の譯文にして誤りなくんば、世に姦淫を犯さざる者とては一人も無きに至るのである。而して多くの誠實なる信者はイエスの此言を以て己れを責め、己れの神の前に立て姦淫の罪人たるを免かる能はざるを知り、苦悶、叫號、以て偏へに彼の赦免に與らんと欲するのである。

然し、イエスは果して斯かる言を發し給ふたのである乎、我等は玆に其事を明瞭にしたく欲ふのである。我等は勿論姦淫の罪を輕く視んと欲するのではない。然しイエスの言を誤解して、罪の輕重を誤るの虞がある。罪に勝つの途は其罪を明かに

するにある。罪を罪以上に見て、或ひは罪以下に見て、我等は一層強く之に惱まさるゝのである。

是れ我等サタンに勝たれざらん爲なり、我等彼の詭計を知らざるに非ず

とパウロは言ふて居る（哥林多後二章十一）。聖書の誤譯は多くの場合に於て惡魔の詭計に力を添える者である。

婦を見て色情を起すは善き事ではないのは勿論である。然し、是れ姦淫である乎、其事が問題であるのである。イエスは普通の日本譯の聖書が示すが如くに敎へ給ふたのである乎。

余は爾うでないと思ふ。馬太傳五章廿八節は爾う譯すべきものでは無いと思ふ。之を正確に譯すれば左の如くに成るべき者であると思ふ。

凡そ色慾を遂げんとて婦を見る者は中心已に姦淫したるなり

と。希臘語の pros to epithumēsai を婦を見ての結果となし、「色情を起す者」と譯せしは大なる誤譯であると思ふ。婦を見ての結果ではない、婦を見るの原因卽ち動機

である。若し「色情」の文字を保存せんとならばラゲ氏の譯の如くに

總て色情を起さんとて婦を見る人は云々

と譯すべきである。然し「色情を起さんとて婦を見る」とは奇異なる心理狀態である。epithumeō は慾を起すに止まらない、慾を遂げんとする念を起すことである。故に更に一歩を進めて余の譯せしが如くに譯すれば、意味は一層明白になるのである。

凡て色慾を遂げんと欲して婦を見る者は中心已に姦淫したるなり。

而してイエスの此言の正當なるは何人も拒む能はざる所である。罪は單に行爲ではない、又意志である。衷に罪を企てゝ罪は已に熟したのである。其遂行と否とは單に境遇の問題である。イエスは罪はすべて之を人の意志に歸し給ふたのである。外に現はれたる其動機が已に姦淫罪を構成すると敎へ給ふたのである。

斯く解して（而して文法上斯く解せざるを得ないと思ふ）、イエスの此訓誡の決して至難を要求する者でない事が判明るのである。婦を見て色情を起すことが果して

姦淫である乎否やは、此一節の教ふる所ではない。此節の明白に教ふる事は、情慾遂行の動機を以て婦を見る者は、其時已に心の中に姦淫の罪を犯したのであると云ふ事である。イエスの此言に基きて、婦人を一瞥するより來る情慾の聯想を以て姦淫罪と認むる事は出來ない。斯く爲して自他を責むるのは此聖語の濫用である。少くとも其誤用である。

ルーテルが曰ふたことがある「余は鳥が余の頭の上を飛ぶことを妨ぐることは出來ない、然し余は彼をして余の頂に巣を作らしめない」と。謂ふ意は是れである、即ち聯想に因る罪念の喚起は之を妨ぐるの途はない、然れども之を我が意志となし、其我の實行となりて現はれんことは、余の堅く誡めて許さない所であると。色情を喚起せらるゝ事は避け難いかも知れない。乍然、其の我が意志と成りて我に實行を促さん事は我の許さゞる所である。我は此意味に於て婦を見るも姦淫を犯さずして濟むのである。

更に又此節に於て注意すべきものは「婦」と譯せられし原語である。希臘語のgunè

は單に女性をいふの詞ではない。哥林多前書七章二節に

人は各自其妻を有ち、女も各々其夫を有つべし

とある「妻」と譯せられし原語は此 gunè である。又以弗所書五章廿二節に

婦（妻）なる者よ、主に服ふが如く己が夫に服ふべし

とある「婦」と譯せられし原語も亦同じく此 gunè である。而して同じ馬太傳の第五章に於て、我等が今茲處に研究しつゝある一節の直ぐ後にある

凡そ人その妻を出さんとせば云々

とある其「妻」なる詞も亦此 gunè である。故に「婦を見る」とは「妻を見る」と譯する事が出來る。而して此場合に於ては、他人の妻を見る事であるは言ふまでもない。而して斯く解して此節の意味は更に一層明かに現はれて來るのである

凡そ色情遂行の動機よりして他人の妻を見る者は云々

と。是れ確かに姦淫である。十誡第七條の「汝姦淫する勿れ」に加へて其第十條「汝その隣人の…妻を貪る勿れ」を破るものである。「惡しき眼を以て他人の妻を見

る事」、是れ明白なる姦淫の罪である。

イエスが茲に誡め給ひし罪の實例は、之をヘテ人ウリヤの妻なるバテシバに對せしダビデの行爲に於て見るのである。事は撒母耳後書第十一章に於て明かである。

讀者の之に就て讀まれんことを望む。

余は茲に此一節を斯の如くに改譯して、色情の聯想を無害視せんとするのではない。使徒ヤコブが曰ひし如く

慾已に孕みて罪を生み、罪已に熟して死を生む

ものなるが故に（雅各一章十五）、罪は其胚胎の前に之を除くべきである。罪の想起は其胚胎である。未だ罪となりて生れずと雖も、然かも罪の種子として其排除を努むべきである。最も安全なる事は罪の思念さへも起さないことである。イエスは此清淨の狀態に於て在り給ふたのである。我等も亦彼と同じく此狀態に達せんことを期すべきである。

然しながら我等は聖書の言を其意義以上に解して、自己に無益の苦悶を招いてはならない。

エホバは我等の造られし狀を知り
我等の塵なることを念ひ給ふ

とある（詩篇百三篇十四節）。神は我等より不可能を要求し給はない。防ぎ難き慾念の聯想を以て之を罪とは認め給はない。罪は想の更に一歩進みたる者である。此事を知て我等は無益の苦悶より免かるゝことが出來る。而して同時に又惡魔の詭計に對して、有力なる作戰計畫を立つることが出來る。余は再びパウロの言を繰返して曰ふ、

是れ我等サタンに勝たれざらんが爲なり、我等彼の詭計を知らざるに非ず、と。

第七　天國の宗教

馬太傳第六章一節—十八節

慎めよ、汝等の義を、人の前に爲さゞるやう、彼等に見られんがために、若し然らずば、報賞を得じ、汝等の父より、天に在ます。(馬太傳六章一節)

慎めよ 注意せよ、何人も陷り易き誘惑なれば、汝等も之に陷らざるやうに注意せよ。

義 單に正義と云ふに止まらず、すべて義き事を云ふ。聖書に在りては「義」は廣き意味の有る辭である。清廉潔白と云ふが如き單に不義を爲さないと云ふ事ではない。義は義しき關係である。人が神に對する關係、相互に對する關係、又自己に對する關係、又神が人に對し給ふ關係、是等の關係の正當なる者をすべて義と云ふのである。故に情を離れたる乾燥無味の正義ではない。情を含みたる溫かき活ける義である。故に謂ふ、

神は義しき者なるが故に必ず我等の罪を赦し給ふ

と(約翰第一書一章九節)。神の義は人の義とは異なり、罪を罰する者では無くして之を赦す者である。神は義しき者なるが故に、恐るべき者に非ずして愛すべき者である。彼は

人に對して義しき關係を保ち給ふが故に、即ち父が子に對するの關係を保ち給ふが故に、人は憚らずして恩寵の座に來るべきである。

父が其子を憐むが如く、エホバは己を畏るゝ者を憐み給ふ

とある(詩篇百三篇十三節)。神の人に對し給ふ義は、父の其子に對する關係、即ち憐憫、撫育、指導として現はるゝものである。

而して神、神たらば、人、人たるべきである。神の人に對し給ふ義は、父の其の子に對する關係であるならば、人の神に對する義は、子の其の父に對する關係であつて、即ち尊敬、服從、奉仕であるべきである。人が神に對して爲すべき事、其事が馬太傳の此場合に於ける義である。普通一般の言辭を以て言ふならば宗教的義務である。祭事といふのは此事である。即ち人が特別に神に對して爲す事である。而して神が

我れ矜恤を欲みて祭祀を欲まず

と言ひ給ひしは、人が神に對して爲すべき事として、彼は人が御自身に對して爲す

祭祀よりも、彼等が相互に對して爲す矜恤の行爲を嘉し給ふとのことである。

愼めよ、汝等の義を人の前に爲ざるやう云々 汝等が神に對して爲すべきことを、人に見られんがために、人の前に爲ざるやうに愼めよとの意である。今日の普通の言辭を以て言ふならば、汝等の宗教的行爲をして世人の注意を惹くための所謂社會的運動たらしむる莫れと謂ふことである。即ちイエスは茲に特に宗教の俗化を警め給ふたのである。宗教――人が神に對して爲すべき義――は是れ神に見られんがために神の前に爲すべき事であつて、人に見られんがために人の前に爲すべき事ではない。故に宗教が「お祭り」に變じ、所謂年中行事の一と化する時に、宗教は宗教で無くなるのである。

然し乍ら事實は如何に? 偶像教の事は措て問はず、基督教其者さへも、今や全然イエスの此要求に反きたる者と化したではない乎。所謂基督教的運動なるもの、其所謂大擧傳道、慈善運動、貴顯紳士招待會……是等は皆な、特に人に見られんために人の前に爲さるゝ事ではない乎。若し信者の或者にして斯かる如何はしき運動

に加はらざる者があれば、斯かる人は基督信者にすら隱遁者、神秘者、非活動者の名を附けられて嘲けられるではない乎。今や公然たらざる傳道は、傳道として認められないではない乎。新聞紙に稱揚られ、人口に膾炙せらるゝことが、神の榮光を顯はすことであると稱るゝではない乎。宗教を社會運動と成す勿れ、人の評判を愼めよ、公衆の喝采を避けよとの、救主の明白なる訓誡は忘却せられて、其正反對が主の名を以て教會の權能の下に行はれつゝあるのである。洵に主の言ひ給ひしが如くに、

人の子臨らん時、信を世に見んや

である(路加傳十八章八節)。今や信者の義は、即ち彼等が神の名を以て爲しつゝある事は、大抵は社會運動として、人に見られんがために、人の前に爲されつゝあるのである。

報賞 報賞に人よりなると神よりなるとがある。人に見られんために、人の前に爲して人よりの報賞が無いでは無い。「大に社會を益す」とか、「其勢力に恐るべき者あり」とか、「其權能侮るべからず」とか云ふ稱讃の辭を以て、評論家と新聞記者とは

社會運動としての宗教を迎へる。然し乍ら、是れ人の施す報賞である。上より臨る報賞は仁愛、平和、喜樂、忍耐、其類である。是れ「天に在す汝等の父より」臨る報賞であつて、此貴き報賞に與からんと欲せば、我等は我等の義(信仰的行爲)を人の前に避けて、隱微たるに鑒たまふ神の前に爲さなければならない。社會的運動としての宗教運動に加はりて、我等に信仰的に何の得る所はない。斯かる運動に從事して得る所はたゞ僅かに世俗の拍手喝采である。而して之に伴ふ堪え難き心靈の貧困である。

神に對して爲すべき義務は斯くの如くにして爲すべきであれば、施濟(慈善)は之を靜かに人の眼を避けて爲すべきである。今日の孤兒院や救世軍が爲すやうに、筒を吹き大鼓を鳴して世の注意を自己に惹くべきでない。斯かる慈善事業に益が全く無いでは無い。然し乍ら、其害たるや實に甚だしき者である。世道人心を害することにして善を誇示するが如きは無い。之に由て施濟は全然施濟で無くなるのである。人はたゞパンを以て生くる者に非ず、多數の施者を心靈的に飢しめて、少數の被施

者を養はんとする今日の慈善事業なる者は、譽むべき贊成すべき事業ではない。

施濟(慈善)が爾うである、祈禱も亦爾うである。祈禱は今や一種の技術である。祈禱の上手がある、下手がある。或る教會に於ける祈禱の如きは、專門家にあらざれば到底行す能はざる事である。聲の調子、樂譜の高底、唱歌隊、獨吟、合唱……祈禱は今や音樂の一部である、美術である。隱微たるに鑒たまふ神に聽かれんための祈禱ではない。人の感覺を喜ばせんための祈禱である。イエスは茲に「重複語を言ふ勿れ」と明白に敎へ給ひしに拘はらず、或る敎會の祈禱文の如きは重複語を以て充滿て居る(『公敎會祈禱文』參考)。信者の祈禱は彼の心の切なる祈願其儘の發表である。「天に在す我等の父よ」と、信者は子が父に語るが如くに天に在す我等の父なる神に祈るべきである。是れに技術も練習も要つたものではない。飾の無い心情有の儘の祈禱、其れが基督信者の祈禱である。余輩は羅馬天主敎會や英國聖公會の祈禱文を讀んで、子が父に語るが如くに感ぜずして、臣下が皇帝の前に伏奏するが如くに覺ゆる。

斷食する時も亦爾うである。若し斷食を要する場合があるならば、人には斷食せざるが如くに見せて爲すべきである。

憂き容をする勿れ……首に膏を塗り、面を洗へ

と。斷食は苦行を自己に課して神に願意の採用を逼る事ではない。靈の要求に促れて自から爲すことである。故に之に何の功德のあるべき筈は無い。斷食を爲した故に祈禱が聽かるゝのではない。熱心の餘り食欲が自から中止するより來る斷食である。基督信者に宗規としての斷食は無い筈である。彼等が若し斷食する場合には、自由に、任意的に爲すのである。斷食を祈禱の必要的條件と見ることは新約聖書の示さゞる所である。(馬太傳九章十四節以下參照)

勿論以上を以て人が神に對して爲すべき事(義)は盡きない。然れども之を爲すの精神は之に由て觀て明かである。神に對して爲すべきことであれば、人に見られんがために人の前に爲すべからず、然らば隱微たるに鑒たまふ爾の父は明顯に報い給ふべしとの事である。神に對する義務、即ち宗教的道德の精神は之にて盡きて居るのである。日を睹るよりも瞭である。然乍ら、顧られざる訓誡にして斯の訓誡の如きは無い。殊に多數政治の行はるゝ今日、イエスの心靈的宗教さへ、多數の贊成に由りて其勢力を維持せらるゝが如くに思はれ、明顯に之を唱へざれば、之を信ぜざるが如くに思はるゝに至りしは最も歎かはしき事である。余輩が西洋人、殊に英米人の基督教に慊ず思ふ主なる理由は、其隱微的、心靈的ならずして、公衆的、政治的、社會的なるに在る。

第八 信者と蓄財

馬太傳第六章十九節——廿一節

信者は財產を作つてはならない乎? 貧は彼が擇んで居るべき境遇である乎? 蓄財は彼に取り罪惡である乎? 是れ眞面目なる信者に屢々起る問題である。此問

題に就てイエスは教へて曰ひ給ふた、

汝等地に財(寶)を蓄ふ(積む)勿れ

と。財は寶である。而して財産は必しも寶ではないのである。神は義人ヨブに報ゆるに多くの財産を以てし給ふた。

エホバ、ヨブを惠みて其終を初よりも善し給へり、即ち彼は綿羊一萬四千匹、駱駝六千匹、牛一千耦、牝驢馬一千匹を有り

とある(約百記四十二章十二節)。神が信仰の報賞として賜ひしものが惡でありよう筈はない。又

謙遜とエホバを畏るゝことゝの報は富と尊貴と生命となり

とある(箴言二十二章四節)。又イエス御自身が山上に此教訓を垂れらるゝに方りて曰ひ給ふた。

柔和なる者は福ひなり、其人は地を嗣ぐことを得べければ也

と(五章五節)。如斯くにして富(財産)其物の罪惡でない事は、聖書全體の明かに示す所である。

イエスの誡め給ふた者は財産ではない、寶である。而して財産は必しも寶でない

のである。寶とは人が其中に心を置く物である。即ち彼が玆に

蓋汝等の財の在る所に心も亦在るべければ也

と言ひ給ひしが如く、人が其心を置く所の物、其物が彼に取り寶となり、又寶であるのである。人が其心を財産に置くに方て、財産が彼の寶となるのである。勿論財産は大なる誘惑である。之を有て人は之に己が心を置き易くある。然し乍ら、是れ財産其物の罪ではない、之を寶となす者の罪である。世には財産を有も之を寶と見做さない者が無いではない。ジオージ・ビーボデー又はアンドリュー・カーネギーの如きは其例である。彼等は鉅萬の財産を有して其中に彼等の心を置かなかつた。彼等は財産を支配して、財産は彼等を支配しなかつた。彼等は寶を財産以外の者に求めた。彼等は財産を有した、然れども地に寶を積まなかつた。

イエスの禁じ給ひしものゝ何であるかを知りて、所謂蓄財に關する彼の教訓を解するに難くない。

蠹喰ひ、銹蝕り、盜人穿ちて竊む所の地に財を蓄ふる勿れ。蠹喰はず、銹蝕らず、

盜人穿ちて竊まざる所の天に財を蓄ふべし。蓋汝等の財の在る所に心も在るべければ也

とある（六章十九—廿一節）。イエスは寶を蓄ふることを禁じ給はなかつた。彼は唯之を地に蓄ふることを誡め給ふたのである。而して地は寶を蓄ふべき所ではない。家と衣とは蠹喰ふ所となり、鐵と銅と金と銀と、其他すべて金屬製の物は、蠹は喰はずと雖も銹びて蝕る。而して偶然蠹も喰はず銹び蝕りもしないものがあるとすれば、其物は盜人の竊む所となる。所謂社會道德の進歩も以て盜人を絶つに足りない。今や金庫製造の技術は其極緻に達したりと稱せらるゝも、之を破るの技術も亦之に循じて進んで居る。酸素が液化せられてより、之を用ひて燒斷ることの出來ない鐵板とては無いとのことである。文明進歩の今日と雖も此地は決して安全なる所ではない。此地に産を蓄へ、寶として之に賴りて何人も失望せざるを得ない。舊き傳道者の言は第二十世紀の今日、民法と世襲財産法との殆ど完全に達せし今日に方りても、其正鵠を失はないのである。卽ち、

我れ觀るに日の下に一の患あり。是は人の間に常にある事なり。卽ち神、富と財と貴とを人に與へて其心に慕ふものを一として之に缺ることなからしめ給ひながらも、神また其人に之を食ふことを得せしめ給はずして他人の之を食ふことあり。是れ空なり、惡しき疾なり

と（傳道之書六章一、二節）。寶は之を此地に積むも詮がない。地其物が腐る者、朽る者、銹る者である。而して罪人の其中に横行するありて、我等は永久に安全なることは能はずである。故に財産は神より之を賜はりて依托物として之を預かることありと雖も、我寶として之を所有べきで無い。寶は之を天に積むべきである、地は失するも失せざる天に積むべきである。

注意せよ、寶は多少に由らない。多き富も之に心を置かざれば寶となりて我等を縛らない。些少の物も之に心を置けば寶となりて我等を束縛する。人の地的なると否なとは其人の所有の多少に由らない。僅少の物に縋りて地に着く者がある。多くの産を與へられて之に頓着せざる者がある。愼むべきは所有物の多少ではない、之

に對して採るべき心の態度である。而して產を與へられて其束縛を蒙らざらんと欲せば、イエスの靈を我が衷なる靈に迎へて、彼の支配する所となるの唯一途があるのみである。

我れ言ふ汝等聖靈に由りて行むべし、然らば肉の欲を成すこと莫らん

とパウロは言ふた。此世の財產に對して信者の取るべき態度は此一言を以て盡きて居ると思ふ（加拉太書五章十六節）。

第九　目の善惡

馬太傳第六章廿二——廿四節

希臘語のハプルースとポネーロスとの研究

身の光は目なり　「光」ではない、「燈」である。第五章十五節に「燈を燃して斗の下

に置く者なし」とある其燈と云ふと同じ言葉である。光を與ふる者である、ランプである。「身のランプは目である」とのことである。勿論今日の我等は爾うは言はないのである。我等は光は太陽より來る者であつて、目は外の光を內に受くる機關であると言ふのである。乍然、實際の所、縱令、外に光があるにもせよ、若し之を內に受くるための機關がないならば、我等各自に取り外の光は無いと同然であれば、身の燈は目であると言ふことが出來るし、又更に進んで身の光は目であると言ふことも出來る。外の光を內に導く者は目なりと云ふ事を簡略にして「身の光は目なり」と云ふたのである。

汝の目瞭ならば　玆に「瞭」と譯せられし希臘語の ἁπλοῦς（ハプルース）は意味の甚だ錯雜したる辭である。故に支那譯並に日本譯聖書に於ても、譯者に由て種々の文字を以て譯されて居る。或ひは「淨からば」とか、或ひは單に「淸くば」とか、或ひは「眩まずば」とか云ふ文字を以て譯されて居る。或ひは哥林多後書十一章三節に傲ひ「誠實」と譯しても可いのである。又同八章二節、同九章十一節、又羅馬書十二章八節に於ては之

と類似の辭が「吝なく」と譯してある。「吝なく施すべし」とある。以上に由て觀れば「汝の目瞭ならば」とあるは、之を「淨からば」とも、亦は「誠ならば」とも、亦は「吝ならずば」とも譯して差支ないのである。而して原語の「ハプルース」にはすべて是等の意味が籠つて居るのである。「汝の目ハプルースならば」と言へば、「汝の目透明にして淨く、誠實にして吝嗇ならずば」と謂ふ意味を通ずるのである。何れの國語に於ても斯かる例は必ず有るのである。一つの辭にして相互に關聯する種々の意味を通する辭があるのである。

全身も亦明かなるべし 「明かなるべし」では足りない。バプテスト教會譯聖書にては「明るからん」と譯してある。些少の相違ではあるが、然し多少の改良であると思ふ。希臘語の φωτεινόν は「光り輝く」又は「光にて充つ」の意である。馬太傳十七章五節に「かゞやける雲」とある「かゞやける」は此辭である。「燦たる光を放つ」の意である。故に「全身も亦明かなるべし」とあるは、之を「全身光にて充つべし」とか、又は「全身輝き渡るべし」とかに改むべきである。

若し汝の目眊からば 原語の儘に「之に反して」なる反意語を加ふべきである。漢字の「眊」は「暗」である。孟子に「胸中正しからざれば則ち眸子眊し」とあるとの事である。孟子の此言、以てイエスの此教訓の善き註解として見ることが出來る。「眊」なる漢字は之を「あしゝ」と訓むことは出來ない。然しマタイが茲に用ひたる辭は、ポネーロス (πονηρός) であつて「惡」の意である。故に「眊」と意譯せずして、ラゲ譯又は左近譯の如くに明白に「汝の目もし惡しからば」と譯すべきである。而して斯く譯してイエス此教訓の意味が更に一層明かになるのである。

「惡しからば」 目の惡しきは目の病みたるのである。或は何等かの故障に由りて目が歪ふたのである。目が完全の用を爲さないのである。或ひは全く光を遮りて內に暗黑を來たすのである。然し惡は善に對して謂ふ辭である。故に「目惡し」と謂ふは「見るものを惡意に解す」とか又は「惡のほか何物をも見る能はず」とか、又は「眞理を曲解す」とか謂ふ意味に解することが出來る。馬太傳二十章十五節に

我が善に因りて汝の目惡しき乎

とあるは、斯かる意味に於て解すべきであると思ふ。「汝の目惡しきが故に善が惡しく見ゆるや」との意味であると思ふ。

然し聖書に在りては「惡」は止に道德上の惡ではない。聖書に在りては「惡」なる辭に特別の宗教上の意味がある。惡を行ふとは神より離れ神ならぬ者に事ふることである。

イスラエルの子孫エホバの目前に惡を行ひしかば

と士師記に繰返して記されてあるのは、此事を謂ふのである。卽ちイスラエルの民がエホバを離れ彼の命に反きて偶像に事へたりとの意である。聖書に在りては惡とは偶像崇拜の事である。神が善であると同時に（路加傳十八章十九節）、偶像は惡であつて惡魔を祀つた者であるとの事である。

「若し汝の目惡しからば」　若し汝の目疾みて其用を爲さず、眞理を曲解し、神を神とし仰がずして神ならざる神を神とし認むるならば云々。前節に於て「瞭」なる辭に種々の意味があると等しく、此節に於ける「惡し」なる辭にも亦種々の意味があるの

である。而して、イエスは是等の相關聯せる意味をかけて、玆に敎訓を宣べ給ひつゝあるのである。

全身暗かるべし　「暗黑を以て充つべし」、前節の「光り輝くべし」とありしに對して謂ふ。

是故に汝の中の光もし暗からば　身の光たる目の惡しき場合には、外の光を內に受くるための目の歪ひたる場合には、全身暗黑と化するは何人も能く知る所である。其如く（是故に）若し汝の中の光、卽ち靈魂の目の惡しき場合には、外なる光に非ずして內なる光にして暗からん乎、其場合には如何との意である。イエスの言辭は簡潔であつて、其中に多くの略辭がある。故に我等は之を解するに方て省かれし略辭を悉く補はなければならない。此場合に於て「汝の中の光」と言ひ給ひて、彼は「汝の中の目」又は「汝の中を光す者」又は「汝の崇拜物」等の事項を同時に語り給ひつゝあるのである。

其暗きこと如何に大ならず乎　其暗黑たる如何ばかりぞ、實に驚くべきに非ずや、

物の譬へやうなきに非ずやとの意である。內なる暗黑は外なる暗黑に譬ふべきもなし。肉の盲者は憐むべしとするも、心靈の盲者の歎かはしきに比ぶべくもあらず。暗黑の最も深甚なるは外なる身の暗黑に非ずして、內なる靈の暗黑である。一言以て之を言はん乎、靈魂が其光なる神を內に宿さゞることである。

「內の光」とは何ぞ？　勿論神である。「內の目」とは何ぞ？　信仰である。而して內の目は外の目ゝ同じく明瞭でなくてはならない。清淨くなくてはならない。神に對しては誠實であつて、人に對しては吝嗇であつてはならない。而して此信仰の目を以て內の光なる神を仰ぎ瞻て靈は靈光を以て充溢れるのである。

ハブルースに明瞭、清淨、誠實、吝嗇ならずの外に猶一の意味がある、其れは單一又は單純である。目は單純でなくてはならない。單純ならざれば明瞭ならず、清淨ならず、吝嗇なりである。目は同時に二物を凝視めることは出來ない。目が若し完全に其用を爲さんと欲せば、之を一物にのみ注がなければならない。茲に於てか、次節の「人は二人の主に事ふること能はず」との敎訓が、內眼保全の敎訓に加へて與

へられたのである。

人は二人の主に事ふること能はず、そは此を惡み彼を愛しみ、此を親み彼を疎むべければ也、汝等神と財神とに兼ね事ふること能はず　忠臣二君に事へず、貞女二夫に見えず、貳心なきを貴むは古今東西變ることなしである。エホバは實に嫉む神である。彼の愛の熱烈なる、彼は全然首鼠兩端を許し給はないのである。彼に事ふる主なる汝の神を愛すべし」と。茲に於てか神に事ふるに誠實なる、清淨なる、目的に丹誠の一事あるのみである。故に謂ふ、「汝心を盡し、精神を盡し、意を盡くして の單一なる目(心)を要するのである。此目(心又は信仰)なくして神を見る事は出來ないのである。此目を通らずして神の光は心靈に漲らないのである　故に言ふ「汝の目若しハブルースならずば」と。神を見るの目は殊更に誠實、殊更に單純、殊更に清淨、殊更に明瞭なるを要するのである。

「神と財神とに兼ね事ふること能はず」　神を明瞭に見んと欲すれば信仰(靈眼)は眊かるべからず、惡しかるべからず、殊に神ならぬ偶像を信ずべからず。單純誠實の

目は、肉の目なると靈の目なるとに關はらず、全然一神教的ならざるべからずとの事である。マムモンは財を司る神である。或ひは財を神に擬へて祀りし者である。而して財に我心を置きて財は寶となり、即ち財神となりて我を司配するに至るのである。愛錢は背神である。マムモン崇拜であつて、劣等の偶像崇拜である。人は神と財神とに兼ね事ふること能はずと言ふ。然り、人は神に事へながら同時に財産に心を傾くることは能ない。若し世に人あり、我は神に事ふると同時に又蓄財に餘念なしと言ふ者があれば、其人は虚僞を言ふ者である。人は神と財とに兼ぬ事ふる能はずである。然り、實に能はずである。

玆に於てか又「ハブルース」の吝嗇ならずとの意味が出て來るのである。吝ならず財に固着せずとの意である。又容易に他に頒つとの意である。而して神に事ふるに又此心がなくてはならない。慈善心である。他を救ふに方て「金放れの善き」ことである。財産を惜まざる心である。此靈眼がなくして神を見ることは出來ない。慈善は他を救ふために有益であるばかりではない、自己の靈に神の光を漲らしむるために必要である。故に謂ふ、若し汝の目吝ならずば全身(亦全靈)光り輝くべしと。

洵にイエスは詩人ならざる大詩人である。文章家ならざる大文章家である。彼はハブルース、ポネーロスの二語に籠る所の種々の意味を以て、財産に對する信者の心掛を各方面より示し給ふたのである。

言ふまでもなく、イエスは希臘語を用ひ給ふたのでなく、アラミ語を用ひ給ふたのであるから、馬太傳記者の傳へし此二個の辭を以て、イエスの此場合に於て用ひ給ひし特別の辭と見ることは出來ない。而してアラミ語に關しては知識皆無なる余は、イエスが此場合に於て用ひ給ひし特別のアラミ語の何んでありし乎、想像することさへ出來ない。乍然、「瞭」と譯せられし希臘語のハブルースと、「眊」と譯されし同語のポネーロスとに通ずべき、或る適當のアラミ語を用ひ給ひしことは之を疑ふことは出來ない。我等はイエスの言語を研究するに方て、深い注意と研鑽とを怠つてはならない。

*

以上の解釋に因り二十二節より二十四節までを意譯せん乎、大略左の如くに成るであらふ。

身のランプは目なり。若し汝の目にして明瞭ならん乎、健全ならん乎、清淨ならん乎、誠實ならん乎、單純ならん乎、汝の全身は光を以て充たさるべし。之に反して若し汝の目にして惡からん乎、眊からん乎、神を仰がずして偶像を瞻ん乎、汝の全身は暗黑を以て充たさるべし。是故に若し汝の內の目惡くして內なる光に接する能はざらん乎、其暗黑の程度如何許りぞや。我れ汝の目は單純ならざるべからずと言へり。洵に人は何人も二人の主に事ふる能はず。蓋此を惡み彼を愛み、此を親み彼を疎むべければ也。汝等神と財神とに兼ね事ふること能はず。

附言

我等今日の日本人に取り、以上のイエスの言を解するの困難は、外國人が日本の和歌を解するの困難に照らし見て稍推量することが出來ると思ふ。試に百人一首中の和泉式部の歌を取つて見んに

大江山いく野の路は遠けれど
まだふみも見ずあまの橋立

とある。日本語と山陰地理とを知悉する者に取りては其意味明瞭にして、歌意の掬すべきあるは言ふまでも無いが、然し二者に暗き外國人に取り其意味の解し難きは一目瞭然である。「生野」を「往く野」にかけて詠み、「玉章」を「蹈み」に擬らへて言ひ、天の橋立を蹈みしことなしと云ふに至つては操詞の術、巧妙を極むとは言ふものゝ、日本と日本語に暗らき外國人をして其意味を理解せしめんとするの困難は決して容易の事でない。安部仲麿が彼の名吟

天の原ふりさけ見れば春日なる
三笠の山に出し月かも

を歸國の船にまで送り來りし彼の大唐の友人に說明せんとせし其困難は、今に至りて思ひ知られるのである。

而して之に類する解釋の困難を、我等は聖書の所々に於て見るのである。而して

馬太傳第六章の此場合の如きが其一つである。幸にして教理上、特に肝要なる問題の其解釋に懸ること無しと雖も、其正解は頗る難事である。我等は原語に籠りたる多趣多方面の意味を知りてのみ、初めて其眞義を判明にする事が可能るのである。

第十 惡の處分

馬太傳第六章三十四節—七章六節

一日の苦勞

神が我等に賜ふ善に疆なきが如くに、亦我等に臨む惡にも疆がない。肉に屬ける惡がある、靈に屬ける惡がある。自己が惡がある、他人の惡がある。我等は神が何故に惡の存在を許し給ふか其理由を知らない。然し惡の實在することは確實である。

而してイエスの弟子は如何にして惡に對せん乎、是れ彼が茲に教へ給ふ所である。

身に屬ける惡、我等は之を不幸と稱び、凶事と稱び、災禍と稱ぶ。貧困の如き、疾病の如き、事業の失敗の如き、肉體の死の如き、是れ皆な身に屬ける惡である。我等は其の我等の身に臨まざらんことを希ふ。我等は之に遭遇せんことを恐るゝが故に苦勞するのである。惡は苦勞の原因である。惡の襲來を恐るゝが故に我等は苦勞するのである。是故にイエスは我等に教へて言ひ給ふたのである、

明日の事を憂ひ慮ふ勿れ、明日は明日の事を憂ひ慮へ、一日の苦勞は一日にて足れり

と(七章三十四節)。茲に苦勞と譯されたる辭が余が謂ふ所の惡である。希臘語のカキヤ(kakia)である。苦勞の原因たる惡である。何人の身にも臨む不幸、艱難、災害等である。而してイエスは我等に告げて言ひ給ふのである、

汝等惡に就て多く思ふ勿れ。惡は前以て豫防する能はず。過ぎにし惡は歎くとも及ばず。日に日に臨む神の恩惠を享受し、凶事は之を深く心に留むる勿れ

と。一言を以て之を言はん乎、汝等樂天的なれとの事である。而して斯く教へ給ひしイエス御自身が、甚だ樂天的であり給ふたのである。彼は「世の罪を任ふ神の羔」であり、「悲哀の人にして病患を知り」給ひしと雖も、而かも其短き一生を悲哀の中に過し給はなかつた。彼の言語は詩歌であつた。彼の祈禱は感謝であつた。彼の無邪氣なる、一日の勞を終へ給へば、颶風吹荒む波の上に漂ふ小舟の艄のかたに枕して寢ね給へりとの事である（馬可傳四章三七、三八節）。而已ならず、彼が敵に付たさるゝ其夜、恐るべき死は面前に迫り居りしにも拘はらず、彼は弟子等と逾越の節筵を共にし、諄々として彼等に教ふる所あり、

彼等歌を謳ひてのち橄欖山に往けり

とありて、讃美歌を以て彼等の質素なる聖き筵を賑はしたる事が判明る（馬太傳廿六章三十節）。英雄の胸中閑日月ありと云ふも、イエスの如くに未來を知覺するの能力を有つ人にして、此場合に於ける此靜謐は我等の想ひ及ばざる所である。實に悲哀の人なりし彼は同時に又歡喜の人であつたのである。彼は能く悲痛を抑制するの途を知り給ふ

た。彼れ御自身が明日の事を憂慮ひ給はなかつた。彼は曾て世に在りし最大の樂天家であつた。

何故に世に惡がある乎、又何故に神を信ずる者と雖も不幸患難を免かるゝ事が出來ない乎、其理由は判明らない。然し信者と雖も人類普通の憂苦を免かるゝ事の出來ない事は確である。茲に至つて我等は身の憂苦を輕く見る必要があるのである。免かるべからざる者は、成るべく平易に之を經過するに若くはない。無窮の榮光に其希望を繫ぐイエスの弟子と雖も、亦惡を取扱ふに此技術が必要である。曾て米國の大說教家なるビーチャーが言ふた事がある。

人は一事を爲すに方て三度苦勞する。爲す前に失敗せずやと憂慮ひて苦勞する。爲すに方て勞力消費のために苦勞する。而して爲して後に其結果如何にやと憂慮ひて苦勞する。故に一事を爲すに方て苦勞を三度重ぬるを以て恒とする。然れども余は唯一回苦勞するに過ぎない。余は爲す時に苦勞するに止まり、其前にも後にも苦勞しない。是れ余が普通の人よりも三倍の事業を爲し得るの秘訣である

と。實に智慧の言辭と稱せざるを得ない。イエスは曾て弟子等に敎へて曰ひ給ふた、

人、汝等を解さば如何に何を言はんと憂慮ふ勿れ、蓋其時汝等の言ふべき事は汝等に賜はるべければ也

と（馬太傳十章十九節）。信者が神の爲めに事を爲すに方て世の所謂「準備」なる者は要らないのである。「汝の齡に應じて能力は汝に加へらるべし」との事である。人生の苦勞は免かる能はずと雖も、餘計の苦勞は決して求むべきでない。信仰は信賴を意味し、信賴は時に應ふ能力の供給を意味するのである。信者が前に苦勞を爲し又後に心配を爲すは、彼の信仰の足りない何よりも善き證據である。

塵埃と梁木

惡は苦勞の素因として身に現はれる。惡は又惡心として又は品性の缺點として他人に現はれる。惡が憂患として自己に臨まん乎、成るべく輕く之を受けて其苦痛を減ずべきである。短處、性癖又は過失として他人に現はれん乎、寛大以て之に處す

べきである。他人の缺點を針小棒大に視るは不信者の常である。信者は其反對に、自己の缺點は塵埃の小なるも之を梁木の大に視、他人の過失は梁木の大なるも之を塵埃の小に視るべきである。信者は自己を責むるに嚴密にして他人を責むるに寛大であるべきである。自己を精査するに顯微鏡の緻密を以てし、他人を月旦するに望遠鏡を逆にしたる遠視眼を以てすべきである。此世に在りて惡は到底之を認めざるを得ない。然れども之を自己に認むるに於ては精密に、他人に認むるに於ては疎漏にすべきである。信者はパリサイの人に倣ひ子子を灑て駱駝を呑んではならない（馬太傳二十三章二十四節）。即ち、他人の過失とあれば子子の小をも灑さんとし、自己の罪科とあれば駱駝の大をも呑まんとする其僞善に倣ふてはならない。我等は他人を議する（審判く）が如くに自己も議せられ、他人を量るが如くに自己も量らるゝのである（馬太傳十八章廿三節以下「惡しき家來」の譬を參照せよ）。

犬と豚

然し乍ら寛大にも程度があるのである。他人の惡事は之を輕視すべきも否認すべきではない。世には寛大に失して、他人の惡事とあれば全然之を認めざる者がある。甚だしきに至ては、其惡事が增長して神を嘲けり聖名を瀆すも敢て問はざる信者がある。而して斯かる極端の寛大(若し之を寛大と稱し得べくば)を誡めたるものが左の有名なる言である。

犬に聖物を與ふる勿れ。又豚の前に汝等の眞珠を投與ふる勿れ。恐らくは彼等足にて之を踐み、振回りて汝等を噬まん

と(七章六節)。茲に謂ふ犬とは何であらふ乎、多分鄙俗の中に沈淪して聖物の何たる乎を辨ふ能はざる不信者であらう(馬太傳十五章廿六節參考)。然らば豚とは誰のことを言ふのであらう乎、疑もなく墮落信者である。

彼等義の道を識りて尙ほその傳へられし所の聖き誡令を棄んよりは寧ろ義の道を識らざりしを善しとす。犬、歸來りて其吐きたる者を食ひ、豚洗潔められて復た泥の中に臥すと云へる諺は眞にして彼等に應へり

とある其墮落信者である(彼得後書二章廿一、廿二節)。敬虔の念なき不信者、一たび救濟の恩惠に與りて惜氣もなく之を投棄し墮落信者、卽ち犬と豚、信者は之に對して如何なる態度に出でん乎、是れイエスが茲に敎へ給ふ所である。

イエスは茲に不信者と交はる勿れとは敎へ給はない。又墮落信者なりとて之を窘迫しめよとは告げ給はない。如何に凡俗の不信者なりと雖も、又如何に陋劣なる墮落信者なりと雖も、イエスの弟子たる者は之を愛し、其最善を計らなければならない。然し乍ら、茲處にイエスの弟子たる者が「犬」と稱すべき是等の不信者と、「豚」と稱すべき是等の墮落信者とに爲しては、ならない事が一つある。其れは神聖の何たる乎を知らざる不信者に聖き眞理を說く事と、一たび光明を得、天の賚賜を受けし後に神の子を再び十字架に釘けし墮落信者に、義と聖と贖とに關はる福音の奧義を語る事と、其事は之を爲す勿れとイエスは茲に禁め給ふたのである。殊に愼むべきは「豚」である。「豚」に救濟の眞珠を與ふるも彼等は之を斥くるに止まらない、足にて之を踐み振回りて之を與へし者を噬むのである。墮落信者が惡むものにして福音

の眞理の如きは無い。一たびは蜂の蜜の甘きに比べられし此眞理は、彼等の不信の故を以て今や菌蔯の苦きに化したのである。不信者の福音に對して無頓着なるに對して、墮落信者は之を忌嫌ふのである。豚に眞珠を投與ふるは無益であるのみならず危險である。福音は彼等に由て瀆され、傳道者は彼等の辱かしむる所となるのである。

而して實際の事實は如何である乎といふに、信者にしてイエスの此禁誡を守る者は至て尠いのである。傳道の責任を感じない者は措て問はずとして、之を感ずる者は大抵は無差別的傳道を試むるのである。彼等は基督教は善き者であると思ふが故に何人に說いても善き者であると思ふのである。彼等は道を說くに人を擇ばないのである。犬も豚も之を聞けば何時か其功德に與かるべしと信ずるのである。殊に一たび道を信じて敎會に入りし者に再び不信者の名を被せるに忍びず、其信仰其行爲の明白に墮落を示すに關はらず、彼を稱ぶに兄弟を以てし彼と交はるに聖徒の交際を以てし、彼と語るに福音の歡喜と希望を以てするのである。然し乍ら是れ彼の喜

ばざる所、否な、甚だ厭ふ所である。彼は自己が斥けし福音の、辭を卑うして懇願的に彼に薦めらるゝを見て、福音に對して益々輕侮の念を起し、自己の傲岸を增すと同時に又益々深く不信の淵に沈むのである。彼に對する好意と寬大とは少しも彼を益する事なく、福音は是がために反て其威權を傷けくれ、主の名は是がために瀆さるるに至るのである。豚の前に眞珠を投與ふるは、豚を益することなきと同時に又眞珠をも害ふのである。愼むべきは實に墮落信者の豚に貴き福音の眞理を提供する事である。

人は何人をも愛すべきである。我等は又容易に人を犬と稱び豚と稱びてはならない。然し乍ら不信者の中に「犬」の有ること、信者と稱せらるゝ者の中に「豚」と稱して誤らざる者の有ることは、疑ひなき事實である。而して傳道の熱心に驅られて人と「犬」とを區別せず、交友の情實に絆されて信者と「豚」とを判別せず、犬に聖物を與へ、豚に眞珠を投與へて、信者は反て神の聖名を瀆し、福音の貴尊を傷けるのである。イエスは今日と雖も猶ほ盛に思慮なき信者の間に行はるゝ所の、思慮なき威

權なき無意義の傳道を禁めんがために、茲に此訓誡を下し給ふたのである。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

惡は無限である。我等は惡の世に遺られたのである。而して惡が身の不幸患難として臨む場合には成る可く輕く之を受け、一日の苦勞は一日にて足れりとなし、歡喜の中に一生を送るべきである。

惡が他人の缺點又は過失として現はるゝ場合には寛大以て之に處し、自己を責むるに嚴密にして他人を糺すに寛容であるべきである。

然し乍ら、寛大にも極度がある。聖の觀念なき者にイスラエルの聖者を紹介すべきでない。又一たび潔められしも再び不信の泥に塗るゝ墮落信者の豚に、福音の眞珠を投げ與ふべきでない。是れ主イエスの禁じ給ふ所である。

第十一　祈禱の効力

馬太傳第七章七節—十二節

イエスの宣たまひし天國の律法は、モーセに由りて傳はりし舊約の律法よりも遙に嚴格である。循つて前者を守るの困難は後者を守るの困難の及ぶ所でない。天國の福祉は慕ふべきものであるが、之に入るの困難の殆ど無限なるを知れば、天國は我れ如き凡夫に取りては有りて無きに等しき者である。我は天國の市民たらんと欲するも之れに入るの能力なきを奈何せんとは、イエスの山上の說敎を聞いて何人にも起る感想である。「然らば誰か救はるゝを得ん」とは此の場合に於てのみならず、他の場合に於ても屢々弟子等の心に起りし疑問であつた（馬太傳十九章二十五節）。イエスの宣べ給ひし天國の律法は、肉を具へたる我等に取りては餘りに純潔である。其實行は我等の在弱を以てしては到底及ぶべくもない。「誰か之れに堪んや」である。イエスの要求と我等の能力との間に天地霄壤も啻ならざる相違がある。

而して此疑懼懸念を除かんがために、イエスは最後に左の一言を述べ給ふたのである。之は是れ「山上の垂訓」の總括とも稱すべき者である。

求めよ、然らば與へられん。尋ねよ、然らば會はん。(門を)叩けよ、然らば開かれん。蓋すべて、求むる者は得、尋ぬる者は會ひ、(門を)叩く者は開かるべければ也

と。イエスは玆に言ひ給ふたのである。

汝等我が福音を聞いて敢て失望するに及ばず。我が要求に應ずるは實に困難なり。我は言へり「汝等の義にして學者とパリサイの人の義に勝るに非ずんば汝等は必ず天國に入る能はず」と。然れども人には能はざる所なりと雖も神には能はざる所なし。汝等は自己の能力に依賴りて我が訓誡を守る能はず。然れども天に在す汝等の父は汝等を助けて、汝等をして能く此至難の業を就げしめ給ふ。求めよ、然らば與へられん。尋ねよ、然らば會はん。叩けよ、然らば開かれん。汝等の能力の不足をば父に祈りて補へよ。彼は喜びて汝等の祈禱に答へ給はん。

と。天國の律法は正さに嚴格である。是れ生れながらの人の能く守ることの出來る者ではない。然ればとて人の守る能はざる者ではない。神の能力に託りて守ることの出來る者である。イエスの訓誡を聽いて其嚴格なるに怖て之を守るの責任を避けんとするは、未だ福音の眞髓に達しないからである。山上の垂訓は祝福を以て始まつた。而して祈禱を以て終つて居るのである。祝福を以て始まり祈禱を以て終る。是れ福音の福音たる所以である。初めが恩惠であつて終りが恩惠である。神の愛を以て始まつて神の愛を以て終るべき者である。イエスは人が神の佑助に依らずして實行し得べき者として、天國の律法を宣べ給はなかつた。神に求めて、彼に尋ねて、彼の聖意の門を叩いて、右の頰を批たるゝ時に又左の頰をも轉らして之に向けるの忍耐、我等を詛ふ者を祝し我等を迫害むる者のために祈るの愛心をも、我有となす事が出來るのである。イエスの弟子たる者は、其祈禱の範圍を善心の祈求にまで擴張すべきである。我等は善事を行して善心を賜はるのではない。先づ祈りて善心其物を賜はり、之に由りて心よりする善事を爲すのである。山上の垂訓を以てイエス

の純道徳と見做す者は、彼が祈禱の勸告を以て之を結び給ひしことに氣の附かざる者である。

求めよ……尋ねよ……叩けよと云ふ。「求めよ」は言辭を以て求めよとの事である「尋ねよ」は足を運びて尋ねよとの事である。「叩けよ」とは手を擧げて叩けよとの事である。口を以て祈求へよ。若し聽かれずば手を伸べて祈求へよとの事である。祈禱は切々たらざるべからずとの事である。然らば必ず與へらるべしとの事である。祈禱は聽かゝるまで忍耐を要するのである。「ひたすら請ふが故に共需に從ひ起て予ふべし」とある(路加傳十一章八節)。求めて聽かれざれば尋ねよ、尋ねて猶ほ聽かれざれば叩けよ、然らば父は汝等がひたすら請ふが故に汝等の需に從ひ、汝等が守るに難しとする我が高き、聖き天國の律法を行ふに足るの能力と精神とを汝等に與へ給はんと、イエスは玆に敎へ給ふたのである。而して祈禱の聽かるゝ理由を述べてイエスは曰ひ給ふたのである、

汝等の中、誰か其子がパンを求めんに石を予へんや。又魚を求めんに蛇を予へんや。然らば汝等惡者なるに善物を其子に與ふるを知る。況て天に在す汝等の父は求むる者に善物を賜はざらんや

と。祈禱が神に聽かるゝ理由は是れである。若し是れが理由にならないならば、人の祈禱が神に聽かるゝ理由とては他には無いのである。祈禱の効驗は之を科學的に證明することは出來ない。祈禱は何故聽かるゝか之を論理的に證據立つることは出來ない。然れども父の親心に訴へて見て、神が其子供の祈禱を聽き給ふ其理由は判明るのである。

父が其子を憐むが如く
エホバは己を畏るゝ者を憫み給ふ

とある(詩篇百三篇十三節)。人なる父が其子を憐む心は固々神より出たる者である。原因は結果より小なる能はずである。人なる父に子を憐むの心があるとすれば、其心を人に賜ひし神には其れ以上の憐憫の心が無くてはならない。「子を持て知る親の恩」と云ふ。然り、「親となりて知る神の愛」である。我れにさへ子を憐むの愛がある。況し

て天に在す我が父に於てをや。祈禱が神に聽かるゝ理由は是れで充分である。是れ以上に所謂「祈禱の哲學」を攻究するの必要は無い。

「汝等惡者なるに」とイエスは其弟子に對つて言ひ給ふた。「惡者」とは「惡魔の同類」といふと同じである。此は過激の言ではあるまい乎。ペテロ、アンデレ、ヤコブ、ヨハネ等は果して「惡者」であつたのであらう乎。而してイエスは彼等を恁く稱びて憚かり給はなかつたのである。「善物は唯一人、神のみ」とは聖書全體が敎ゆる所である。聖書は近代人の如くに、人の性の善を說いて世の歡迎を博せんとはしない。聖書は明白に人の性來惡者なるを唱へて、彼を根本的に惡より拯はんとする。「汝等惡者なるに猶ほ其子を憐むを知る」とイエスは言ひ給ふた。惡者なるに猶ほ善性の存るを知る。況して絕對的に善者なる天に在す汝の父は云々と、イエスの論證に强硬にして抗すべからざる所がある。イエスは祈禱の効力に就き更らに語を續けて曰ひ給ふた、

是故に汝等凡て人に爲られんと欲することは亦人にも其如く爲よ、是れ律法と預

言者たる也

と。己れの欲せざる所は之を人に施す勿れとは孔子の金言である。己れ人に爲られんと欲することは亦人にも其如く爲すべしとはイエスの玉詔である。前者は消極的に害を他人に加ふる勿れと誡め、後者は積極的に善を他人に施すべしと敎ゆ。人の道の終局は無害なることである、神の道の終局は至善なることである。退いて己を潔うする道と、進んで愛を完全うする道と、其間に天地の相違がある。

其事は判明つたとして、何故の「是故に」である乎。進んで人に善を爲すことが祈禱の効力に何の關係がある乎。是は人に對する事であつて、彼は神に對する事ではない乎。是れと彼れとは全く別の事ではない乎。

爾うでないのである。神に善物を求むる事(祈禱)と他人に善事を爲す事との間に、最も密接なる關係があるのである。故にイエスは「是故に」と言ひ給ひて、効力ある祈禱の必要條件として善事實行の玉詔を下し給ふたのである。彼は曰ひ給ふたのである、

汝は自己の努力を以てして天國の市民たる能はず。其の資格を得んと欲して汝は神の佑助を仰がざるべからず。汝は祈りて善心の恩賜に與らざるべからず。是故に汝は神に爲られんと欲するが如くに人に爲さゞるべからず。「汝が人を量る如く己も量らるべし」と我が言ひしは此事なり。汝は人に汝の有する善物を與へて、神の有する善物即ち聖靈の恩賜に與らざるべからず

と。恁くして道德は宗教に結附けられたのである。祈禱は人が神に對して取るべき態度であつて、善行は人が人に對して爲すべき事である。而して人の神に對する態度は彼が人に對する態度に由て定まるのである。人を惠まんとするの態度は神に惠まるゝの態度と成り、人を憐まんとするの態度は神に憫まるゝの態度と成るのである。是故に使徒ヤコブは曰ふた、

憐むことをせざる者は鞫かるゝ時また憐まるゝこと無からん

と(雅各書二章十三節)。而して「鞫かるゝ時」に限らない、何時にても神に憐まれんと欲する者は人を憐むべきである。神に我が祈禱を聽かれんと欲すれば、人が我に祈求はざる

前に自ら進んで我が欲する所を人に施すべきである。汝等凡て人に爲られんと欲すること云々とある。其「人」と云ふ中に神も含まれてあるのである。此場合に於て「人」は「他者」の意である。「汝以外の者」の意である。故にイエスの此言を左の如くに變へるも其根本の意味は變らないのである。

汝等すべて神に爲られんと欲することは亦人にも其如く爲よ

と。六章十四、十五節に

汝等もし人の罪を免さば天に在す汝等の父も亦汝等を免し給はん。然れど若し人の罪を免さずば汝等の父も汝等の罪を免し給はざるべし

とあると其意義は同じである。汝等神に爲られんと欲する如くに人に爲すべしと云ひて、基督信者の道德の原理は明白に言表はさるゝのである。

「是れ律法と預言者たる也」是れ舊約の全部たる也。神を愛す、神を愛するの途として人を愛す、神に愛せらるゝの條件として人を愛す、舊約全部の教ふる所は之に過ぎずとのことである。而して天國の福音も亦畢竟る所之に外ならないのである。「是

れ律法と預言者たる也」と言ひて、イエスは祈禱の効力に關はる彼の訓誡を終へ給ふたに止まらない、是を以て山上の說教を終へ給ふたのである。彼は初めに言ひ給ふた、

我れ律法と預言者を廢るために來れりと思ふ勿れ、廢るために來りしに非ず成就せんためなり

と(五章十七節)。而して今や將に說教を終へんとして言ひ給ふたのである、

是れ律法と預言者たる也

と。我が茲に宣べし此言、是れ實に律法と預言者たる也とのことであつた。愛、神は父として人を愛し給ふ、人は子として神を愛すべきである。而して神を愛するの愛を以て他の人を愛すべきであると、是れ律法と預言者とである。而して亦イエスの福音である。天の高きも地の深きも是れ以外には達しないのである。

山上の垂訓に關する研究 終

大正九年八月三十日印刷
大正九年九月三日發行

山上之垂訓に關する研究
定價金五拾錢

著者　東京府豐多摩郡淀橋町大字柏木九百拾九番地　內村鑑三
同所
發行兼印刷人　東京府豐多摩郡淀橋町大字柏木九百拾九番地　山岸壬五
發行所　聖書研究社
印刷所　東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地　株式會社　秀英舍第一工場

不許複製

内村鑑三著書

聖書研究社發行

- 初版 研究第二之十年 定價壹圓七錢 郵稅十二錢
- 五版 研究十年 定價壹圓 郵稅十二錢
- 四版 感謝十年 定價壹圓 郵稅十二錢
- 再版 所舊約十年 定價壹圓 郵稅十二錢
- 再版 感想十年 定價壹圓 郵稅十二錢
- 八版 基督教問答 定價壹圓 郵稅十二錢
- 三版 復活と來世 定價九十錢 郵稅六錢
- 五版 歡喜と希望 定價六十錢 郵稅四錢
- 五版 デンマルクの話 定價三十錢 郵稅二錢

岩波書店發行

- 五版 基督再臨講演集 定價七十五錢 郵稅六錢
- 四版 信仰日記 定價一圓三十錢 郵稅八錢

警醒社書店發行

- 十八版 基督信徒の慰 定價四十錢 郵稅四錢
- 十六版 求安錄 定價六十錢 郵稅四錢

内村鑑三主筆

聖書之研究

世界唯一の書なる基督教聖書の研究を目的とする雜誌なり、然かも教會又は外國宣教師とは何等の關係なし、純然たる日本人の信仰を傳ふ、智的ならず、靈的なり、而かも知識を重んじ、深遠なる宇宙の觀察の上に確乎たる信仰を築かんと務む、キリストの神性、聖書の神權、身體の復活、キリストの再臨を說いて憚らず、創刊以來二十年に達す、誠實なる讀者を海の內外に有す、毎月一回十日發行、一册に付き定價金參拾錢、一年分(十二册)金參圓、郵稅を要せずすべて前金の事。

發行所 東京府下豐多摩郡淀橋町柏木九一九番地 聖書研究社 振替東京七四九八

392
127

終